

VIEW21

〈ビュー21〉
高校版
Volume 4

2016
October

10月

探究学習とは何か？ どう進めるか？

特集

生徒・教師・教科が つながる探究学習

授業を進化！ 思考を深化！
実践 アクティブ・ラーニング

現代文

栃木県立宇都宮高校 黒川治彦 はろ ひこ

指導変革の軌跡

大阪府・大阪市立

咲くやこの花中学校・高校

福岡県・久留米市立

南筑高校 なん ちく

暑いし、きつい!
でも、やり遂げた
達成感がある



①② 男子生徒約 10 人は、ネギの収穫作業を手伝った。天候は曇りだったが、ビニールハウス内は蒸し暑く、流れ落ちる汗を拭いながらの作業だった。出荷先が埼玉県の業者だと知り、作業の手にも自然と力がこもる。3 時間ほどで軽トラック 3 台分のネギを収穫した。

③④ もう 1 班は草むしり。「三角ホー」という初めて使う道具に苦労していた生徒も、徐々に慣れていき、雑草の山はどんどん高くなっていく。雑草が伸び放題だった一帯は、すっかり奇麗になった。この畑には、秋の収穫に向けて、次の作物が植えられるという。

ハートを
こがせ!

Vol.10

埼玉県立上尾橘高校 東北支援ボランティア 被災地の「今」を 感じた生徒の思いが 活動を受け継いでいく

震災を忘れてはいけ
ないし、
1 人でも多くの人に訪
れてほしい

2011 年から毎年、埼玉県立上尾橘高校は、東日本大震災の被災地でのボランティア活動を続けている。今年は生徒 16 人、教師 4 人が参加。宮城県南三陸町でネギの収穫や雑草除去を手伝い、収穫最盛期の人手不足に一役買った。

南三陸町では、がれきは撤去され、道路は整地されて広くなり、復興は徐々に進んでいる。しかし、人口の流出が止まらず、商業施設が少なくなることから、買い物も一苦労だと話す語り部の言葉に、生徒は「ここに来て、住んでいる人の話を聞かないと分からないことがたくさんある」と語った。そうした思いが後輩に受け継がれ、毎年の活動につながっている。

そこに行かなければ
感じられない
ことがあった

⑤

⑤⑥ 「南三陸町では住民 800 人あまりが犠牲となり、今も約 200 人が行方不明です」と話す語り部の言葉に生徒は息をのむ。そして、骨組みだけが残る南三陸町防災対策庁舎の前にある献花台で黙祷。高さ 12 メートルの破壊された建物が目の前にあっても、「この高さまで津波が来たのが信じられない」と生徒は言う。



⑦⑧ 2011 年 6 月に初めて訪れたボランティア活動では、個人宅のがれきや汚泥の除去を行い、2 年目は農業用水路の開通を支援した。参加した生徒の「『自分とは関係がない』と思う人が 1 人でも減るように」という思いが、今の活動につながっている。



2 特集

生徒・教師・教科がつながる
探究学習

4 インタビュー

問題解決的な「探究学習」がこれからの時代を生きる力を育む

関西大学総合情報学部教授 黒上晴夫

10 実践事例

「探究学習」を学校全体で展開する3つのアプローチ

教科の授業における探究学習 ● 宮城県仙台第三高校

探究学習に必要な力やスキルを各教科のアクティブ・ラーニングで育成

「総合的な学習の時間」における探究学習 ● 愛知県・私立金城学院中学校・高校

研究手法をスキルとして身につけ、「問い」にこだわる探究学習を实践

キャリア教育における探究学習 ● 島根県立江津高校

キャリア教育の中に探究学習を位置づけ、社会における自分のあり方を深く考える

23 「探究学習」開発・推進 追跡レポート 次号より随時掲載

語り合い、考え抜き、創り上げる、龍谷大学付属平安中学校・高校の新たな「学び」

24 ハートをこがせ！

埼玉県立上尾橋高校 東北支援ボランティア

震災を忘れないよう自分で見て、感じたことを伝えていきたい

26 授業を進化！ 思考を深化！ 実践 アクティブ・ラーニング

過去の学習内容と行き来する活発な議論の中で、深い読解を実現する

現代文 ● 栃木県立宇都宮高校 黒川治彦

30 指導変革の軌跡

大阪府・大阪市立咲くやこの花中学校・高校

進路指導 ● 高い目標を持たせる個に応じた指導で、希望進路の実現を図る

福岡県・久留米市立南筑高校

学校改革 ● 教師団の組織力を協同学習で高め、学校改革を推し進める

38 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

1年生秋 進路志望調査用紙

42 大学Evolution 大学が拓く新しい学び

英語力と人間性を授業内外で育てるカリキュラムでグローバル・リーダーを育成する

北海道大学 ● 新渡戸カレッジ

46 VIEW'S REPORT

多面的・総合的な評価による入試とインターネット出願の新たな試み

高大接続の改善を目指し、四国国立5大学が「活動報告書」を活用した入試を実施

5人の日本の高校生が、海外の高校生に挑戦！

ディベートの世界大会で日本代表チームが2勝をもぎ取る！

64 Reader's VIEW

〈ビュー21〉

高校版

Volume 4

2016
October

10月

今月の表紙メッセージ

探究学習とは何か？
どう進めるか？

○「探究学習」をテーマに今号の特集を企画するにあたり、現場の先生方に探究学習の現状をヒアリングいたしました。その中で、今回最も印象的だったのが、そもそも探究学習がどのような学習活動か、その理解が進んでおらず、「探究学習＝アクティブ・ラーニング」と捉えている先生すらいるというお話でした。組織的な実践を考える前に、まずは、自校にとっての「探究学習とは何か？」を検討・共有することが重要なかもしれません。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇
<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

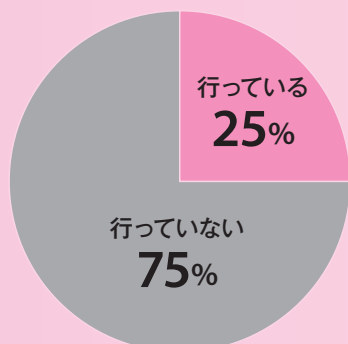
*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます *本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

生徒・教師・教科が つながる 探究学習

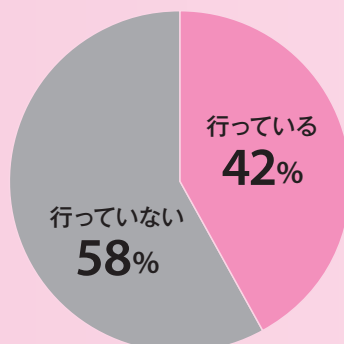
次期学習指導要領では、「理数探究（仮称）」の新設や、「総合的な学習の時間」の名称を「総合的な探究の時間（仮称）」に改め、探究する能力を育むための総仕上げとしてのあり方を明確化することが検討されるなど、探究学習の重要性が一層高まる方向で議論が進んでいる。しかし、現場では、指導・評価のノウハウや時間の不足などの理由から、探究学習は組織的な実践までには行き着いていないようだ。そこで、今号は、今後求められる探究学習について整理した上で、実践事例を通じて、探究学習の具体的な姿と学校全体での推進を実現するヒントを探っていく。

探究学習の実施状況

Q. ご担当の教科・科目において探究学習を行っていますか。



Q. 「総合的な学習の時間」で探究学習を行っていますか。



行っていない理由

- ◎探究学習についての具体的なイメージが把握できていないから。(埼玉県)
- ◎ノウハウ不足。時間をどのように確保するのかという問題から。(静岡県)
- ◎授業時間が少なく、行うことができない。(三重県)
- ◎形式、体裁を整えるので精いっぱいであり、内容の深化については、生徒・教師の力量が不十分。(奈良県)
- ◎教科内で探究学習の有用性・必要性を共有できていない。また、他クラスの授業進度を気にせざるを得ない状況があるので行けない。(広島県)

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果（アンケートは、2016年6月にウェブとファクスで実施。回答数は57）

本号のテーマ

今後求められる「探究学習」と、 学校全体でその推進をどう実現していくかを考える

今後求められる「探究学習」とは？ なぜ、それが求められるのか？

インタビュー【P.4～9】



関西大学
総合情報学部 教授
黒上晴夫

- ◎今後求められる「探究学習」とは、自らの考えや課題を更新し、深めながら、探究のサイクル（課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現→振り返り・考えの更新）をらせん状に繰り返していく学びのこと。
- ◎そのような学びが求められる背景には、社会の変化に伴い、そこで求められる資質・能力も変わろうとしていることがある。
- ◎すなわち、様々な事象に対して、何が問題であるのか、課題を設定し、問題解決に向けて様々な知識や情報を取り込みながら分析し、思考を巡らせ、問題の解決に導いていく力が求められており、そうした力を身につけられるのが、今後求められる「探究学習」である。

今後求められる「探究学習」を、学校全体でどう実現していくか？

教科の授業における 探究学習

宮城県
仙台第三高校
【P.10～14】

同校の「探究学習」の概要

- ◎生徒が自ら学びたいテーマを発見・設定し、主体的に解決する学習活動を「非構成的AL」と定義し、「課題研究」、「総合的な学習の時間」で実施。さらに、教師が学習する分野や教材、活動などを設定し、限定された範囲内で生徒が主体的に学び、探究に必要な力を身につけることを目指す学習活動を「構成的AL」と定義し、各教科の授業で実施。

学校全体での「探究学習」が実現したポイント

- ◎まず、全教師が参加するワークショップを実施し、生徒の現状について忌憚なく語り合った。その中で、目指す授業の3つの観点を明確化し、全員で共有した。
- ◎全教師が参加する、授業の研究・開発組織を編成。授業の研究・開発に協働して取り組むことが、有効な教員研修の役割も果たす。

「総合的な学習の時間」に おける探究学習

愛知県・私立
金城学院中学校・高校
【P.15～19】

同校の「探究学習」の概要

- ◎「スキル・ベースド・アプローチ」による探究学習「Dignity」を「総合的な学習の時間」で実施。1年次は探究力を養うための基礎づくり、2年次は研究の実践トレーニング、3年次はその集大成として小論文に取り組む。

学校全体での「探究学習」が実現したポイント

- ◎「Dignity」を通して身につけさせたい力を教師間で共有するために、有志が教育活動の基本姿勢を示すグランドデザインを策定。さらに、その後のグランドデザイン改訂時には、多くの教師が議論に参加したことで、当事者意識が向上した。
- ◎「Dignity」の担当者をほぼ全教科から選出したことで、教科横断で情報交換する機会が増え、「Dignity」のノウハウが各教科の授業でも実践され始めた。

キャリア教育における 探究学習

島根県立
江津高校
【P.19～22】

同校の「探究学習」の概要

- ◎将来の進路を考えるキャリア教育を、探究のステップに沿って実践。進路行事も同様の考え方で再編し、それまで単発的に行われていた個々の取り組みのつながりを意識した指導にした。

学校全体での「探究学習」が実現したポイント

- ◎探究学習の取り組みの理念を明確化するために、探究学習の名称を、より生活や地域に根ざしていることを示す名称に変更。
- ◎キャリア教育の流れをつくる軸として、ベネッセの「進路サポート」を導入。メイン教材の「進路探究ワーク」によって、生徒の活動を可視化できるようにした。

次号より随時掲載

「探究学習」開発・推進 追跡レポート
～語り合い、考え抜き、創り上げる、
龍谷大学付属平安中学校・高校の新たな「学び」～
【P.23】

京都府・私立龍谷大学付属平安中学校・高校では、2016年10月より、カリキュラム・マネジメントの観点も踏まえた、自校の生徒にふさわしい探究学習の開発・推進に取り組みます。校内にプロジェクトチームを設置し、17年度開始を目指す同校の取り組みを、本誌では随時レポートしていきます。今号では、探究学習の開発・推進に挑む同校の教師に、その決意と展望を語っていただきました。

探究のサイクルを繰り返して
考えを深め、更新していく

「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)の中で、教科横断的・総合的な学習とともに、探究学習にも取り組まなくてはいけないことが、既に現行の学習指導要領の中に明記されています。そして、現在審議が行われている次期学習指導要領では、探究学習をより一層重視する方向で議論が進められています。特に高校においては、選択科目として「理数探究」や「日本史探究」「世界史探究」などを創設したり、総合学習を「総

問題解決的な「探究学習」が これからの時代を生きる力を育む

関西大学総合情報学部教授 黒上晴夫

現在審議中の次期学習指導要領では、探究学習をより一層充実させることを打ち出す方向で議論が進んでいる。なぜ今、探究学習が求められているのか。そもそも、探究学習とはどういったものなのか。中央教育審議会の「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ」の委員を務めている関西大学の黒上晴夫教授に聞いた。

総合的な探究の時間」に改めたりすることが検討されています。

総合学習における探究学習とは、生徒自身による問題解決的な学習活動が、発展的に繰り返されていくことを言います(図1)。探究学習では、生徒自身が課題の設定を行い、設定した課題に基づいて情報を収集し、整理・分析した上で、課題の解決案を自分の意見としてまとめ、論文やプレゼンテーションなどの形で表現します。表現したものについては、他者との議論の機会や、自身の振り返りの場を設けるようにします。すると、他者からの意見や質問、自身の振り返りを通して、考えの更新

が行われ、さらに深い問題意識が生まれます。その問題意識を基にまた新たな課題を設定して、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現に取り組んでいく。そのようにして自らの考えや課題を更新し、深めながら、探究のサイクルをらせん状に繰り返していく学びが、探究学習なのです。

では、なぜ次期学習指導要領では、探究学習をこれまで以上に重視しようとしているのでしょうか。その背景には、私たちを取り巻く社会環境が大きく変化しつつあり、新しい時代を生きていく上で必要となる資質や能力も変わろうとしていることがあります。

2014年11月に下村博文文部科学大臣(当時)が出した「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)」では、教育課程の新たなあり方を構築することが必要となる社会的な背景について、次のように述べられています。

「生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化し、子供たちが就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになるだろうと指摘されています。また、成熟社会を迎えた我が国が、個人と社会の豊かさを追求していくためには、一人一



くろかみ・はるお◎大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。大阪大学助手、金沢大学助教授を経て、現職。専門分野は教育工学。中央教育審議会教育課程部会「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ」の委員等を務める。主な著書に『こうすれば考える力がつく! 中学校思考ツール』『考えるってこういうことか! 「思考ツール」の授業』(ともに小学館)など。

人の多様性を原動力とし、新たな価値を生み出していくことが必要となります」

そこで述べられている社会状況の予測に対して、異を唱える人はあまりいないでしょう。例えば、職業については、今後AI(人工知能)が進化すると、定型的な業務は次第にAIに代替され、多くの人が知的創造性の高い仕事や、高次の判断が必要な仕事に就くことを求められるようになると言われています。

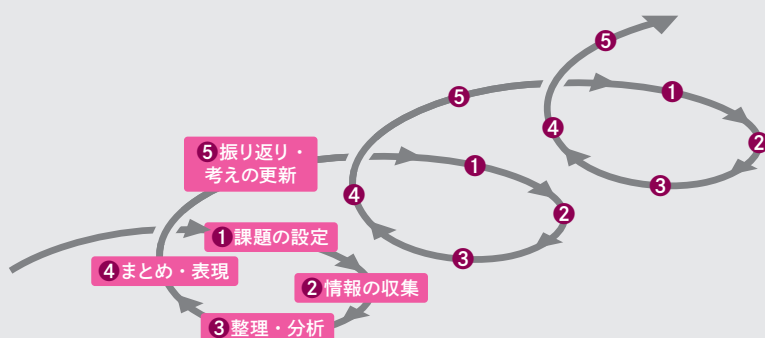
その時に必要とされるのは、知識の量だけではありません。様々な事

探究学習は 教科学力も伸ばしていく

先生方の中には、探究学習の重要性については理解しつつも、「探究学

象に対して何が問題であるのか、すなわち課題を設定し、課題解決に向けて様々な知識や情報を取り込みながら分析を行い、思考を巡らせ、課題の解決に導いていく、そういった力が必要不可欠となります。そして、まさにそうした力を身につけさせることをねらいとしているのが、探究学習なのです。

図1 探究学習のプロセス



1 課題の設定	現状と目標とのギャップを捉え、課題意識を持つ、課題点を見いだす。
2 情報の収集	必要な情報を取り出したり、収集したりする。設定された課題に対し、解決プロセスを決定し、必要な情報は何かを考えたり、情報収集を行ったりする。
3 整理・分析	問題解決を見通して情報を処理する。多様な手法で収集した情報を構造化・可視化し、多様な視点から分析する。
4 まとめ・表現	結論・主張の伝え方を吟味し、他者に伝えたり、議論したりする。
5 振り返り・考えの更新	まとめ、表現したもの(成果)について、グループ・各自で何ができていて、何ができていないかを把握するとともに、その間のプロセスについても検証し、次に向けて新たな課題を生み出す。

*「高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」と「未来を拓く『探究』導入編」(ベネッセより刊行→P. 9参照)を基に編集部で作成

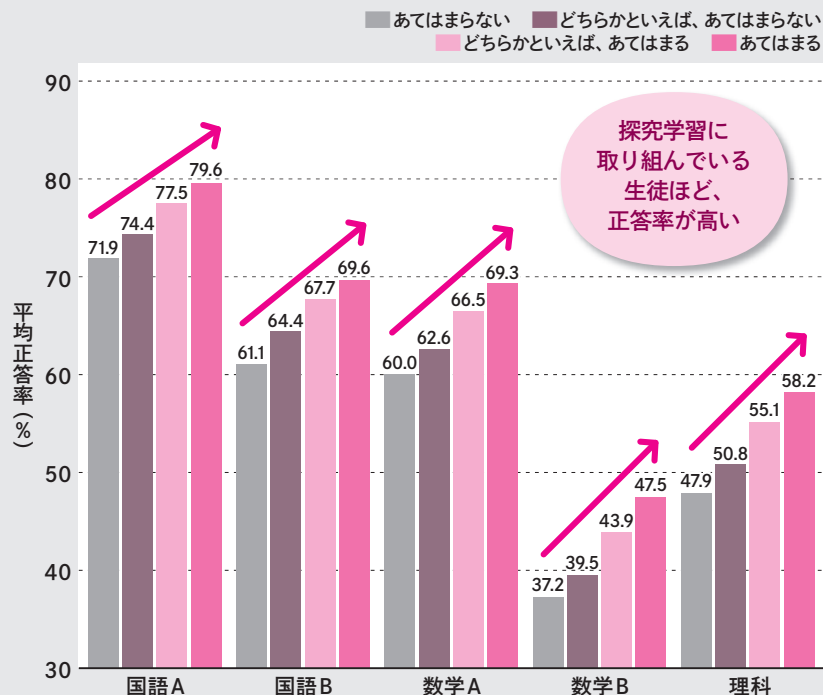
習ばかりに注力しすぎると、各教科で必要とされる知識・技能の習得がおろそかになるのではないかと、いった疑問を抱いている方もいるかもしれません。しかし実際には、探究学習に力を注いでいる学校ほど、生徒の知識・技能の習得も進むというデー

タがあります。

文部科学省では毎年、小学校6年生と中学校3年生を対象に、「全国学力・学習状況調査」を実施しています。それによると、総合学習の中で、「自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの

図2 「総合的な学習の時間」に取り組む姿勢と教科学力との関係（中学校）

Q.「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。



出典／文部科学省「平成 27 年度 全国学力・学習状況調査」結果

学習活動に取り組んでいる」と答えた生徒ほど、各教科の正答率が高く、なおかつ知識を問うA問題、知識活用力を問うB問題ともに高いという結果が出ています（図2）。

高校では本調査は行われていないため、探究学習と各教科の知識および知識活用力との相関関係を測るこ

とはできませんが、もし、同様の調査が実施された場合には、同じような結果が出ると予想されます。

生徒が、国際問題や地域社会、科学技術や生命・医療といった様々なテーマの中から自ら課題を設定し、課題解決に向けて探究学習に取り組む過程では、教科に関連する（ある

いは教科を超えた）多くの知識が必要となります。しかも、その知識は課題意識と結びついていいるために、一度習得すると容易には剥落（はくらく）しません。丸暗記した知識は忘れやすいですが、生活に必要な知識や、興味・関心のある分野に関する知識は、忘れにくいと同じです。

また、探究学習を通じて、自ら学ぶことの面白さを感じ取り、自己学習力が高まることも、教科ごとの知識や知識の活用力を押し上げる要因になると考えられます。

先生方の中には、「基本的な知識すら十分に身につけていない生徒に、探究学習に取り組ませるのは難しい」と考える方もいるでしょう。しかし、むしろそれは逆です。課題設定が生徒の興味・関心に基づいたものであれば、生徒は学ぶことが、社会のあり方や、社会の中での自分の生き方を考える上で非常に大切なことに気づき、それが教科学習にも意識を向けるきっかけになります。

そもそも知識と探究学習との関係は、まず知識を習得して、次にその知識を基に探究学習を行うという順番ではありません。探究学習を行う

中で、知識も身につけていきます。そして知識が身につけば、さらに探究学習も深まっていくといった相互作用的な関係にあるのです。小学校でも総合学習が成り立っているように、探究学習を始める時点での知識量の多寡は問題になりません。

また、進学指導に多くの時間を取ることを重視し、総合学習が学習指導要領の本来の目標に沿った内容になっていない高校もあるようです。探究学習を推し進めることが、教科学力の向上にも結びつくことから考えると、その状況は大変もったいないと思います。

**探究学習は、
学びの資質、能力を高める**

日本の中高生の学力の状況は、国際的な学力比較調査においては伸びが見られるものの、自己肯定感や学習意欲、社会参加の意識が低い、根拠や理由を示しながら自分の考えを述べるといった力が弱いといった指摘もあります。探究学習は、そうした学びに対する意識や、異なる価値観を受容する能力を高める上でも有効な教育活動だと考えられます。

図3 「総合的な学習の時間」における教育のイメージ

高校の「総合的な学習の時間」を、より探究的な時間となるよう位置づける

- ・探究する能力を育むための総仕上げとしてのあり方を明確化し、名称も見直す（例えば「総合的な探究の時間」とする等）
- ・特定の分野を前提とせず、実社会・実生活から自ら見いだした課題を探究することを通じて、より自分のキャリア形成の方向性を考える
- ・生徒が主体的に探究していくことを助ける教材等の作成も検討

探究の見方・考え方 「各教科等における見方・考え方を総合的・統合的に活用して、広範かつ複雑な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の複雑な文脈や自己のあり方・生き方と関連づけて問い続けること」

【高校】

学習指導要領で示す目標（イメージ）

探究の見方・考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、自己のあり方・生き方を考えることを通して、次の通り資質・能力を育成することを目指す。

- ・課題（学習対象）に関する概念的知識を獲得し、課題の解決に必要な知識や技能を身につけ、探究の意義や価値を理解するようにする
- ・実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する力を育成する
- ・主体的・協同的（協働的）に課題を探究し、互いのよさを生かしながら、新たな価値の創造やよりよい社会の実現に努めようとする態度を育てる

各学校が設定する目標

上記を踏まえ各学校が目標を設定し、その目標を踏まえた内容を定める。

→各学校の教育目標に直接つながり、その高校のミッションを体現するものとなるようにする

各教科等の見方・考え方を、総合的な学習の時間で総合的・統合的に活用

各教科等

各教科等の見方・考え方が、多様な文脈で使えるようになり、などして確かなものになり、各教科等の「深い学び」を実現

*文部科学省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（第2部）」（2016年8月26日）を基に編集部で作成

周知のように、新しい時代を生きていく上で必要となる資質や能力が変化しつつある中で、大学入試も大きく変わろうとしています。「知識・技能」に加え、「思考力・判断力・表現力」を中心に「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が、センター試験に代わって、20年度から導入される予定です。また、各大学の個別選抜試験については、既に選抜方法や試験内容に変化が見られます。

私自身は、現行のセンター試験も、知識の詰め込みだけでは対応できず、思考力を働かせることが必要な良問が多いと感じています。とは言え、その思考の過程は見えず、導き出せる答えが1つしかない点にも課題があります。

新テストの実施にあたっては、様々なハードルがあるのは事実ですが、これからの時代に求められる資質や能力を考えると、大学入試改革の動きが逆戻りをするのではないでしょう。入試への対応という面でも、高校現場は探究学習により力を注ぐ必要が出てきています。

教科と総合学習を有機的に結びつける

フルバージョンの探究学習は、主に総合学習の中で行われます。探究学習では、①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現→⑤振り返り・考えの更新という、時間のかかる5つのプロセスをらせん状に繰り返していくことになり、すなわち、教科の授業の中でそれを実践していくことは、物理的に困難です。教科の授業では、各教科の知識・技能の習得や、その活用力の向上を目指すべきです。

ただし、だからといって教科の授業で、探究的な学びが全く必要ないというわけではありません。様々な資料から情報を整理して自分の考えをまとめることは国語や英語でできるでしょうし、事象を科学的に分析して原因や解決策を考察することは数学や理科の授業で可能です。教科の授業においても、生徒自身が主体的に学び、かつ仲間との対話や協働を通じて、自らの考えを深め、知識

の構造化を図ることのできる授業に
していくことが求められます。つま
り、「アクティブ・ラーニング」が不
可欠となります。ちなみに、知識の
構造化とは、元々持っていた知識に
新たな知識が加わることで、物事に
対する理解が深まったり、物事を
見る時の思考の枠組み自体が更新さ
れたりすることを言います。

また、知識の活用場面では、習
得した知識を実社会で起きている問
題に関連づけて、生徒に考えさせ
たり、課題に取り組ませたりするとい
った工夫が大切になってきます。

そうして深い知識や見方・考え
方が身につけば、総合学習の中で探
究学習に取り組む時に生きてきます。
また、逆に探究学習に取り組む中で、
各教科の知識や見方・考え方を活用
することによって、教科の学びが一
層深まります（P.7図3）。各教科
と総合学習を、そうした関係にして
いく必要があります。

生徒の学びを深めるには 教師のかかわりが重要

総合学習の中で探究学習を行って
いくためには、探究の各プロセスを、

ただ形式的にたどればよいわけでは
ありません。極端に言えば、適当に
テーマを設定し、インターネットで
検索して出てきた情報をレポート用
紙に貼りつけて提出しても、それら
しきものはでき上がるでしょう。し
かし、それでは探究学習とは言えま
せん。各プロセスの生徒の学びがよ
り深いものになるように、教師がしつ
かりとかかわる必要があります。

例えば、「課題の設定」では、その
課題に対する自分なりの考えを持つ
ことができ、なおかつその考えを深
め、更新していけるものを、教師が
生徒の興味・関心に働きかけながら、
生徒自身に見つけさせることが鍵と
なります。この時に、例えば「街づ
くり」をテーマにした場合、「〇〇市
の街づくりについて」といった課題
設定では、市の施策や住民の取り組
みの状況を調べる、といった調べ学
習の範囲にとどまってしまう可能性
があります。「人口の流出はどのよう
にしたら止められるか」「観光客に
来てもらえる街にするためにはどうす
ればよいか」といったように、「情報
の収集」や「整理・分析」を行う過
程の中で、生徒が自分の意見を確立

することが必要となる
ような課題を設定する
ことが大切です。

また、「整理・分析」
の時には、集めてきた
情報を単にきれいに並
べればよいわけではあ
りません。情報を多面
的に見たり、抽象化や
構造化をしてみたりと

いった作業を生徒に行わせるような、
深い分析が求められます。

そうしたことが求められるのは、
総合学習のみならず、創設が検討さ
れている「理数探究」などの探究的
科目も同じです。ただし、「理数探究」
では、理科や数学に関する、より高
度な理解につながっていく課題を設
定しなくてはいけないため、課題の
設定に教師がより強くかわる必要
があるかもしれません。

探究学習に対する 推進体制を整える

探究学習を深い学びにしていくた
めには、当然、教師の力量が問われ
ます。探究学習の経験が少ない教師
は、戸惑うことも多いでしょう。そ



うしたことを踏まえると、個々の教
師の努力に委ねるだけではなく、学
校全体としての推進体制を構築して
いくことが求められます。学校では、
学習指導要領の改訂や大学入試改革
の動きなども踏まえ、探究学習の充
実がこれまでに以上求められること
を説明した上で、研修などを通じて
具体的な実践方法を伝え、導入のハ
ードルを下げるのが大切です。

指導ノウハウの共有のためには、
教師同士で互いに授業を見合う授業
研究も有効でしょう。ただし、探究
学習では、教師が教壇に立って授業
をすることは少なくなります。一方、
生徒の活動は少人数や個人単位にな
る場面が多く、そのため、ただ授業
を見ているだけでは、つかみどころ

図4 「総合的な学習の時間」の実施状況（高校）

■学年別の実施内容（2015年度入学者）

複数回答（%）

学年	学習内容	国際理解	情報	環境	福祉・健康	伝統と文化	防災	まちづくり	キャリア	社会と政治	その他
1年	普通科	25.4	19.0	23.9	27.6	27.1	16.2	9.4	80.5	12.1	23.3
	2年	29.2	19.2	23.0	24.5	35.2	14.9	7.9	84.1	15.4	21.5
	3年	23.2	18.9	20.2	23.7	22.2	13.6	6.4	84.2	20.1	17.6
	※実施学科数	39.7	27.1	33.3	36.6	45.5	19.1	12.9	90.8	26.2	34.2
2年	専門学科	22.2	16.6	19.5	23.3	24.5	13.6	7.2	70.2	8.7	23.4
	2年	24.4	16.4	19.1	22.8	27.9	11.8	6.9	72.2	10.0	23.4
	3年	16.8	15.5	17.6	19.6	20.0	11.5	8.6	62.6	11.7	22.9
	※実施学科数	27.4	21.0	25.7	25.8	32.3	14.2	11.1	72.7	16.2	31.4
3年	総合学科	9.1	8.6	10.2	15.2	11.7	7.1	4.6	32.0	4.1	11.7
	2年	28.1	20.8	25.3	25.7	38.2	13.9	13.2	88.9	18.8	24.0
	3年	34.9	35.6	35.6	40.1	37.3	15.4	18.5	77.1	27.1	34.6
	※実施学科数	42.4	38.7	41.4	46.1	51.5	19.9	21.5	91.6	31.6	64.6

出典／文部科学省「平成27年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」

がないままに終わってしまうことになりかねません。病院で医師や看護師が行うカンファレンスのように、個々の生徒の学習活動の状況や、そ

の時々々の学習のねらいをあらかじめ共有した上で臨むと、中身の濃い授業研究になります。

また、高校での探究学習は、生徒

が個人単位で課題を探究するケースが多くなると考えられます。しかし、課題に沿った情報収集の方法や、整理・分析の仕方、教師が一人ひとりの生徒に細かく指導していくのは大変な負担となります。できれば生徒同士が学び合いながら、そうしたスキルを身につけていけるような仕組みを整えたいものです。例えば、ある高校では、先

輩たちが総合学習で書いたレポートが図書室に保管されており、生徒はそれを読めば、情報収集の仕方や分析のコツが学べるようになっていきます。そのようにして学校は、探究学習が少しでもスムーズに進むように、体制を整える必要があります。

現在高校で行われている総合学習のテーマを見ると、「キャリア教育」が圧倒的に多いようです（図4）。私は、キャリア教育が「社会で今起きている問題を知り、その中で自分はいかに生きていくべきか。社会問題を解決するために、自分はどんな役割を果たせるか」といったことを生徒に深く考えさせることを目的としたものであれば、非常に意味があると思います。しかし、総合学習の中で行われているキャリア教育が、実質的には進路指導になっているなど、探究学習にまで深まっていけないケースが少なくありません。キャリア教育を行うのであれば、生徒の目を大きく社会に開かせるようなものにしてほしいと思います。

繰り返しますが、社会は大きく変

化しており、大学入試も変わりつつあります。これからの時代に、生徒が自己の能力を発揮しながら充実した人生を送れるようにするためには、今、どのような教育が必要なのかを教師が意識しながら、探究学習に取り組んでいく必要があるのだと思います。

「探究学習」導入のヒント満載の情報誌

『未来を拓く「探究」導入編』（無料）をご用意しました！

探究学習を「総合的な学習の時間」だけでなく、教科の授業や部活動など、学校の教育活動全体で取り入れていくためにはどうすればよいか、さらには、課題設定をどのようにすればよいかなど、実践のヒントと具体的な指導事例（「質問・疑問マトリクス」ワークシートの実例など）をまとめた教師向け無料情報誌です。ご興味のある先生は、以下までお問い合わせください。

◎問い合わせ先 お客様サービスセンター：
フリーダイヤル 0120-350455
◎受付時間 月～金 8:00～19:00 /
土 8:00～17:00（祝日・年末年始除く）



黒上教授監修！

実践事例

「探究学習」を学校全体で展開する 3つのアプローチ

教師一人ひとりの取り組みにとどまることなく、学校全体での推進が求められる探究学習。視野の持ち方や達成感、振り返りなどをよりダイナミックなものとするためには、探究学習の枠組みをどのように形づくればよいのか。ここでは、「教科の授業」「総合的な学習の時間」「キャリア教育」の3つの切り口から考える。

教科の授業における
探究学習

宮城県仙台第三高校

探究学習に必要な力やスキルを 各教科のアクティブ・ラーニングで育成

宮城県仙台第三高校は、「総合的な学習の時間」における探究学習の充実を図るため、各教科のアクティブ・ラーニングを通して探究学習に必要な力やスキルを育成している。そうした授業の研究・開発を推進しているのは、全教師が参加する校内組織の「GS-JD研究センター」だ。

全教師が参加するワークショップで 目指す授業の3観点を明確化

宮城県仙台第三高校は、2010年度に「授業づくりプロジェクト」を立ち上げ、授業改善と評価法の開発に取り組んできた。背景には、同年に県立高校が全県一区となるなど、

学校を取り巻く環境が変化し、進学に力を入れる学校間の競争の激化が想定されたことがある。

「授業づくりプロジェクト」では、最初に生徒の現状を把握して目指すべき授業の方向性を定めるため、全教師が参加するワークショップを実施した。生徒の現状について忌憚^{きたん}な

く語り合う中で、自校の生徒の長所は「素直で真面目」であること、そして課題は「受け身の姿勢が目立ち、すぐに答えを欲しがる」といった実態をすべての教師で確認した。それらに加えて、地域から期待される学校の使命などを踏まえた上で、仙台第三高校として目指すべき授業として、「知的好奇心を刺激する」「考える仕かけが組み込まれている」「生徒が主体的になる」という3つの観点を設定した。授業づくり研究センター長の滝井隆太先生はこう言う。

善に生かすのかは、基本的に各教師の考えに委ね、『ALをしなければならぬ』といった条件はつけませんでした。そのため、以前は取り組みの内容や進捗はまちまちでしたが、現在では約9割の教師が毎授業にALを取り入れています。多くの教師が、ALを取り入れることは生徒のために必要な授業改善の1つであるとして理解したからこそその結果だと言えるでしょう」

ただ、時には型に重きを置いたALになっているケースも見られたため、15年度にALの質をさらに高めることを目的として、「非構成的AL」「構成的AL」という同校独自の考え方を整理し、改めて全教師で共有を進めている。

「非構成的AL」とは、生徒が自ら学びたいテーマを発見・設定し、主体的に解決する学習活動を指す。いわゆる生徒主導の探究学習として、



宮城県仙台第三高校教頭 佐藤善則 さとう・よしのり
教職歴31年。同校に赴任して2年目。「オルタナティブなものの方を心がけ、生徒の視野を広げる」



宮城県仙台第三高校教頭 茂木 悟 もり・しげお
教職歴28年。同校に赴任して1年目。「教師の仕事は生徒を変えること」「教師の仕事は生徒を変えること」



宮城県仙台第三高校 滝井隆太 たきい・りゅうた
教職歴23年。同校に赴任して7年目。授業づくり研究センター長。生徒指導部副部長。「呼吸同時」



宮城県仙台第三高校 齋藤英明 さいとう・ひであき
教職歴18年。同校に赴任して9年目。進路指導部長。「生徒とともに、明るく、前向きに、「一生懸命に」



宮城県仙台第三高校 村岡正良 むらおか・まさよし
教職歴16年。同校に赴任して9年目。教務部長。「一日一日を大切に。生徒のよいところを伸ばす」



宮城県仙台第三高校 菅原佑介 すがわら・ゆうすけ
教職歴12年。同校に赴任して3年目。2学年担任。「スキルアップに努め、生徒に還元する」

主に「課題研究」、「総合的な学習の時間」で行う。一方、「構成的AL」は、教師が学習する分野や教材、活動などを設定し、生徒は限定された範囲内で主体的に学ぶことを目指す学習活動で、各教科の授業に取り入れている。

「探究学習は、生徒の経験やスキルが不十分のまま取り組んでも深まりません。そこで、『構成的AL』において教師が単元のねらいや生徒の状況を踏まえて授業をデザインし、探究学習の様々なプロセスを生徒に経験させて、探究に必要な力を身につけさせます」(滝井先生)

宮城県仙台第三高校

◎建学の精神は、「心身の健康」「真・善・美の追求」「愛と知の稔り」。コアスパーサイエンスハイスクールの終了後は、独自のグローバルサイエンス事業を立ち上げ、探究学習に力を注ぐ。

◎設立 1963(昭和38)年

◎形態 全日制/理数科・普通科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2016年度入試合格実績(現現計)

国立大は、北海道大、岩手大、東北大、山形大、東京大、東京学芸大、東京工業大、一橋大などに242人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ431人が合格。

◎URL <http://www.sensan.myswan.ne.jp/>

実際の研究を追体験させて 課題発見・設定力を育成

「構成的AL」で最も力を入れているのは、課題発見・設定のプロセスだ。2学年担任の菅原佑介先生はこう説明する。

「探究学習を進める上で、生徒が最も苦労するのは、探究の第一ステップである課題の発見・設定です。『身近な事象に着目して課題を見つけなさい』などと指示しても、ともすれば調べ学習になりがちで、実際にできる生徒は多くありません。そこで、『構成的AL』を通して、繰り返し課題発見・設定の経験をさせています」

例えば、1年生の学校設定科目である「課題研究基礎」の授業では、銅を熱すると色が変化するという現象を題材にして、「構成的AL」を展開している。

この授業は、15年に「銅箔の色調変化の研究」というテーマで、「インテル国際学生科学技術フェア(Intel ISEF)」で3等に入賞した同校の生徒の研究をベースとしている。同研究

は、自動車のマフラーが変色することへの興味から始まり、銅箔の色調変化の規則性を発見して数式化したことが高く評価された。この研究の課題発見・設定のプロセスを追体験させる。

「まず生徒に、自動車のマフラーの写真を複数枚見せるなどして気づきを促します。生徒が『どうして自動車によってマフラーの色が違うのか』と疑問を持ったタイミングで、『実際に試してみよう』と、銅板と加熱器を与えます」(菅原先生)

銅の色調変化を目のあたりにした生徒の知的好奇心はどんどん膨らみ、「どうして銅を熱すると色が変わるのか」「ほかの金属でも同じことが起こるのか」といった疑問を持つ。その後で教師は、この学校の先輩も同じような興味から研究を展開させたことを明かし、生徒自身の疑問や発想が本格的な研究のテーマにつながることを説明する。そうした追体験を積み重ねる「構成的AL」の中で、生徒は課題発見・設定の方法を実感を持って理解していく。

図1 国語科のルーブリック

■ルーブリック評価規準

※本時の目標・指導事項①～⑥に対し、以下の規準により評価を行う。

【学習指導要領 国語科の目標】及び【学習指導要領 国語総合の目標】

国語を①適切に表現し②的確に理解する能力を育成し、③伝え合う力を高めるとともに、④思考力や想像力を伸ばし、⑤心情を豊かにし、⑥言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

※本時は、「関心・意欲・態度」「話す・聞く・読む・書く」「言語についての知識・理解・技能」の各評価に代え、各観点に対するルーブリック評価規準を、指導要領の目標を基に設定した。

評価の観点	3	2	1	0
詩の理解 ②④⑤	詩の持つ雰囲気や情緒、込められている作者の心情を的確に捉えている。	詩の持つ雰囲気や情緒、込められている作者の心情をおおまかに捉えている。	詩の持つ雰囲気や情緒、込められている作者の心情をあまり正確に捉えていない。	詩の持つ雰囲気や情緒、込められている作者の心情を全く捉えていない。
豊かな表現 ①③⑥	提示された言葉、設定された条件を根拠に、自らの言葉で豊かに表現している。	提示された言葉、設定された条件を根拠に、自らの言葉で表現しようとしているが、稚拙である。	自らの言葉で表現しようとしているが、提示された言葉、設定された条件との妥当な相関が認めにくい。	自らの言葉で表現していない。あるいは、提示された言葉、設定された条件との関係が認められない。
思考・発想 ②④⑤⑥	独創的な着眼点と自由な発想、自らの思考と想像をもって、本時の活動に取り組んでいる。	自由な発想、自らの思考と想像をもって、本時の活動に取り組んでいる。	先入観や言葉の持つイメージにとらわれすぎて、詩的・文学的発想に達しない。	思考・発想に取り組んでいない。想像しようとしていない。
態度・参加 ①③	伝え合いや発表、文章を書くなど、本時の活動に、パートナーと活発に交流し相手の意見を受容しつつ、主体的・積極的に取り組んでいる。	伝え合いや発表、文章を書くなど、本時の活動に積極的に取り組んでいる。	うなずき・傾聴などの姿勢は見られるが、積極性が認められない。	伝え合いや発表、文章を書くなど、本時の活動に全く取り組んでいない。

※本時の評価は、簡易ポートフォリオ（ワークシート）、授業者の観察、学習者の相互評価により、上記規準をもって行う。

*学校資料を基に編集部が作成。

各教科が探究学習につながる授業を実践

2年生の国語の評論では、探究学習に必要な仮説を立てて推論する力や、自分の意見を論理的に表現する力を育成している。

例えば、芸術論の授業では、教科書に載っている美術史家・高階秀爾氏の評論「日本人の美意識」を扱う際、説明画像として掲載されている日欧の絵画や彫刻だけをスクリーンに映し出す。まずは、生徒に本文を読ませない状態で画像を観察させて、考

えたこととその理由を説明させるのだ。

「本文を読んでいない生徒に、高階氏が『うつくし』『きよし』という2つの古語をキーワードとして日本人の美意識を論じたことを伝えるなど、少しずつヒントを与え、高階論を推論させます。そこに自説を加えることで、自分なりの仮説ができていきます。仮説は突拍子のないものであっても、生徒なりの根拠があれば受け入れますが、単に『そう感じた』という意見に対しては、徹底的に理由の説明を求めます」（滝井先生）

仮説をグループで共有した後は、本文を読んで自分の考えと照らし合わせる。漠然と読み進める場合に比べて、深い理解や気づきが得られることは想像に難くない。

また、1年生の数学の授業では、一人ひとりの生徒が創意工夫して校舎の高さを測るというテーマを与えている。その上で、夏季休業にはグループごとに測定器の工作を課題とした。教務部長の村岡正良先生は次のように述べる。

「この活動では、原則としてインターネットなどで調べることを許可

せず、グループで話し合って数学的な知識を応用して作るように求めました。夏季休業に教室に集まって製作するグループもあるなど、主体的に協働する姿が見られました。休み明けには三角比の知識を応用した測定器などが持ち寄られて、実測を行いました」

英語では、「授業づくりプロジェクト」を経て現在、コンテンツベースの授業への転換を模索している。佐藤善則教頭はこう説明する。

「自分の考えを伝えたり、議論したりしたくなるコンテンツが自分の目の前に存在しているからこそ、生徒は実際に英語を使いたくなります。コンテンツ重視の授業は、英語の運用力の育成に効果的であるほか、思考力を深めたり、別の視点に気づかせたり、コミュニケーション力を育んだりします。そうした力が、探究学習において効果を発揮するのだと思います」

教師に負担をかけることなく次に生かせる評価を模索

「構成的A.L」の評価法として、各教科でルーブリックの導入が進んで

いる。

例えば、2年生の国語の詩歌の単元では、詩の理解や表現など4つの観点から4段階で評価するルーブリックを作成している(図1)。さらに、授業で用いたワークシートを簡易ポートフォリオとして活用し、複合的な評価を行う。

16年度は、パナソニック教育財団の助成を受け、パフォーマンス評価におけるICT活用の研究にも取り組む。特に同校が力を注いでいるのは、生徒のポスターセッションなどのパフォーマンスを動画撮影し、授業づくりで連携している宮城教育大学の教員や大学院生などに評価を依頼するという研究だ。

「高校の教師以外の複数の視点から生徒の活動を評価できるほか、パフォーマンス評価の増加による教師の『評価疲れ』を軽減するねらいもあります。さらに、動画として蓄積していくことで、次年度以降も教師が指導や評価の改善に生かせるほか、次に学ぶ生徒たちに先輩のパフォーマンスを見せるなど、新しい指導教

材にすることができるといった利点もあります」(滝井先生)

SSHでの研究手法を基に 普通科向けプログラムを開発

「非構成的AL」の探究学習は、理数科では「課題研究」が中心となる。同校は、10年度よりスーパーサイエンスハイスクール(以下、SSH)に指定され(12年度からコアSSH)、課題研究の手法や指導法の研究に取り組んできた。

「課題研究」では、一人ひとりの生徒が自らテーマを設定した上で、主体的に研究を進めて成果を発表する。前述の通り、銅箔の色調変化に関する研究は国際的な評価を受けたほか、テーマ例を挙げると、「植物の生長と耐性」「蜃気楼の人工発生」「心臓の拍動調節」など、いずれも本格的な研究だ。

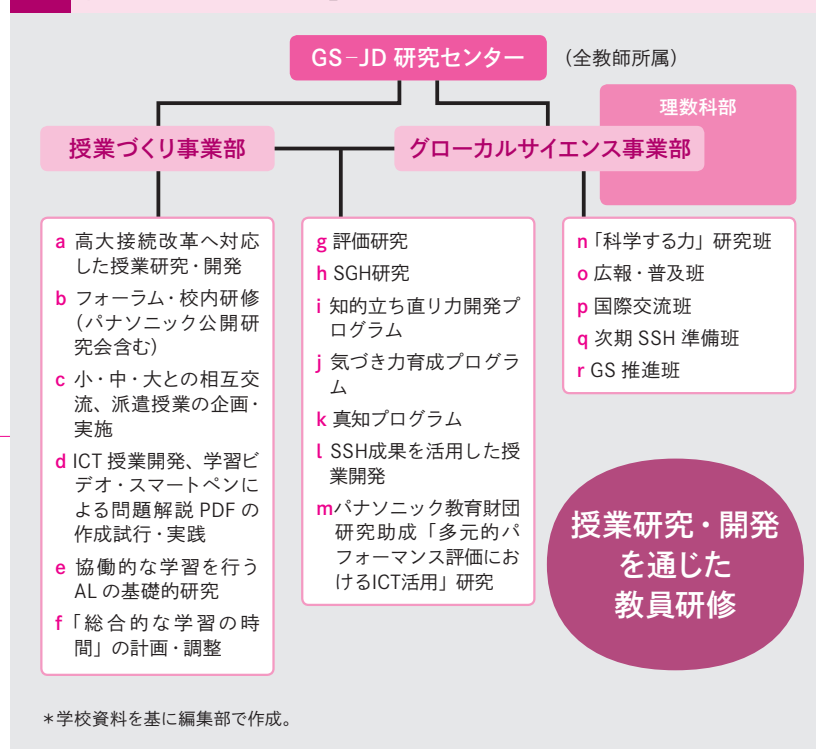
一方、普通科の生徒は、「総合的な学習の時間」の中で探究学習に取り組んでいる。ただし、自由に探究テーマを設定した従来の探究学習では、生徒の活動は調べ学習の域を出

なかったため、現在は、理数科の課題研究の手法を応用した「真知プログラム(仮称)」と称する、普通科の生徒のための新しい探究学習を開発中だ。

「センター試験が廃止され、新テストが導入される当該学年の18年度入

学生には、質・量ともに充実した探究学習を実施することが求められます。それまでに許される時間を考えると、遅くとも17年度の学校説明会で、探究学習のプログラムの内容を公表する必要があります。現在は、独自のテキストを作成し、16年度の1年生

図2 「GS-JD 研究センター」組織・事業図



から試行しています」(滝井先生)

「真知プログラム」では、1年次は、主に「構成的AL」を通して、気づく力や課題設定力などの育成と並行し、情報収集・分析やディスカッション、論文作成、プレゼンテーションといったスキルを身につけることになる。そして2年次は、「非構成的AL」として本格的な探究学習に移行する。文系は、英語で脚本を書いて演じたり、社会科学系のフィールドワークや教育学系の質問紙調査を実施したりすることなどを想定している。また、理系は、理数科の「課題研究」と同様のテーマを想定している。

「今後、『真知プログラム』の実践を深めるに連れて、探究学習をより充実させる上で、不足している力やスキルが改めて見えてくるはずです。そうした課題には、各教科の『構成的AL』の内容を再検討しながら対応していこうと考えています」(滝井先生)

全教師が参加する研究組織が授業改革を推進する

同校の探究学習の研究を推進しているのは、教師全員が参加する組織

体制だ。SSHによって得られた知見をベースとして、15年には独自のグローバルサイエンス(以下、GS)事業をスタートすると同時に、「授業づくりプロジェクト」の組織と一体化して、「GS-JD(グローバルサイエンス・授業づくり)研究センター」を新たに設置した。「GS-JD研究センター」には18のプロジェクト・事業があり、全教師がいずれかに所属している(P.13図2)。

「私たち教師にとっては、近年の教育のあり方の大きな変化に対応することが焦眉の急となっていますが、授業の研究・開発は個人だけでは難しく、教科ごとに方向性を合わせるのも困難が伴うのが実情です。すべての教師がそれぞれのプロジェクト・事業の実践を持ち寄り、授業の研究・開発に協働で取り組むことが有効な教員研修になると考えています」(滝井先生)

「構成的AL」の開発・実践を行うプロジェクトの1つである「気づき力育成プログラム」は、探究学習における課題発見・設定には「気づき力」が欠かせないという観点から、授業づくりに取り組む。前出の銅箔の変

色を題材とした授業は、同プログラムが開発したものだ。

「大学入試でも、気づきが必要とされる問題が出題されています。そこで、複数の大学教員と連携して入試問題を分析し、どのような気づきが求められるのかを検討して、『気づきの正体』を解き明かす研究も進めています」(滝井先生)

生徒の意欲・関心が高まり、進学実績は着実に向上

全校体制での研究を進める中で、教師の意識は大きく変化してきた。以前は、教師間で指導ノウハウや教材の共有はほとんど行われなかったが、今では公開授業期間以外にも気軽に授業を見学し合う。茂木悟教頭は、「教科や学年、また、個々の教員の間にあった敷居が低くなるように働きかけています。風通しのよさが研究の推進を支えていると感じます」と述べる。

「授業づくりプログラム」の発足以来、ALや探究学習を推し進めてきたが、国の教育改革が進む中で取り組みの意味が明確になり、一昨年頃から教師間に「先行してきた取り組み

みを大切にして、もっと深めていこう」といった意識が生まれ、一体感が強まっている。

進学実績の向上にも教師は手応えを感じている。進路指導部長の齋藤英明先生は次のように説明する。

「近年、進学実績は着実に向上しています。それは学校諸活動の総体の結果と捉えています。主因の1つには授業づくりの試みがあると考えています。この取り組みにより、生徒の授業中の姿勢が主体的になったことと併せて、入試でも成果が得られていることは、教師の自信につながっています」

今後の課題は、教育活動全体の力リキュラム・マネジメントを再検討することだ。

「今後も、従来のな受験学力を担保しながら、新しい学力を育成してきたいです。主体的・能動的に課題に取り組むという意味では、学校行事や部活動などは取り組み方次第で非常に効果的なALになり得ますから、すべての教育活動を有機的に結びつけて、育てたい生徒像を実現していきたいと思います」(滝井先生)

「総合的な学習の時間」における探究学習

愛知県・私立金城学院中学校・高校

研究手法をスキルとして身につけ、「問い」にこだわる探究学習を実践

金城学院中学校・高校では、調べ学習に終始した従来の「総合的な学習の時間」の反省から、研究に必要なスキルを徹底的にトレーニングし、「問い」の設定を重視する探究学習への転換を図った。2016年には新しい学力観への対応、育てたい人材像の浸透を目的としてランドデザインの改訂を行い、さらなる深化を目指している。

「感想レベル」の研究に 終始した初期の探究学習

金城学院中学校・高校が、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）における探究学習の見直しに着手したのは2006年のこと。同校では、01年から「共に生きる」をテーマとする探究学習を行ってきた。1年次は福祉問題、2年次は国際問題についてグループでテーマを決めて探究・発表を行っていたが、多くのグループが一般的な感想や希望を述べるにとどまっていた。総合学習の立ち上げからかわってきたカリキュラム研究部長の柳瀬公代先生は言う。

「探究に必要な問いの設定や情報収集・分析、分析結果の報告などのトレーニングをしないまま取り組み始めたため、単なる調べ学習、結論ありきの探究で終わっていたのです」

その原因を探るため、教師たちが生徒の発表内容を分析したところ、調べ学習と探究の違いを理解していない生徒が多いこと、研究法のトレーニングが欠如していることが原因であると分かった。そして07年、教師たちは総合学習の改編に着手する。よりどころとなったのは、シチズンシップ教育で使われる「スキル・ベースド・アプローチ」だ。情報収集・分析の方法をスキルと捉えてトレー

金城学院中学校・高校副校長

長屋頼子 ながや・よりこ

教職歴35年。同校に赴任して36年目。「すべての活動が、生徒一人ひとりの成長や将来のキャリアにつながるものにしていきたい」

金城学院中学校・高校

柳瀬公代 やなせ・きみよ

教職歴25年。同校に赴任して26年目。カリキュラム研究部長。「物事の見方や考え方の転換をもたらす授業をデザインしたい」

金城学院中学校・高校

山崎貴美 やまざき・たかみ

教職歴17年。同校に赴任して18年目。国際教育課。「生徒がどんな時でも前向きに歩むことができるように、常に笑顔で！」

金城学院中学校・高校

中山大輔 なかやま・だいすけ

教職歴15年。同校に赴任して9年目。企画広報担当。「一人ひとりが大事にされていることを、生徒たちに感じてもらいたい」

金城学院中学校・高校

水野志帆子 みずの・しほこ

教職歴12年。同校に赴任して13年目。企画広報担当。「生徒の喜びや悲しみを共有しながら、一緒に成長していける教師でありたい」

金城学院中学校・高校

山内麻記子 やまうち・まきこ

教職歴12年。同校に赴任して13年目。企画広報担当。「正解を示すのではなく、生徒に寄り添う姿勢を常に持っていたい」

ニングする手法で、1年次は探究力を養うための基礎づくり、2年次は研究の実践トレーニング、3年次はその集大成として小論文に取り組む。

愛知県・私立金城学院中学校・高校

◎女性の社会的地位の向上を目指して創立されたプロテスタント系ミッションスクール。スクールモットーは「主を畏れることは知恵の初め」。

◎設立 1889（明治22）年

◎形態 全日制／普通科／女子

◎生徒数 1学年約320人

◎2016年度入試合格実績（現浪計）

国立大は、千葉大、名古屋大、名古屋工業大、三重大、神戸大、奈良女子大、愛知県立大、名古屋市立大などに18人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、東京理科大、早稲田大、金城学院大、南山大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ339人が合格。

◎URL <http://www.hs.kjho-u.ac.jp>

ランドデザインにより 取り組みのねらいを共有

08年には、探究学習のプログラムを通して身につけさせたい力を教師間で共有するために、夏季休業中に有志が集まり、教育活動の基本姿勢を示すランドデザインが練られた。学力を「知識・理解」「価値・態度」「活用力」の3要素で捉え、その3つの学力をバランスよく身につけることで、同校の目指す「自立・自律・連帯できる女性」を育成することが確

認された。

同校の総合学習が「Dignity」と名づけられたのも、この時である。「Dignity」は品位・尊厳といった意味だが、6代校長のエラ・ヒューストン氏がしばしば生徒に語りかけた言葉だという。長屋頼子^{ながやよりこ}副校長は、「『Dignity』を持って行動できる人は『深く物事を考えることができる人』であるという考えに基づいています。ブランドデザインとともに本校の総合学習で育みたい力を象徴する名称だと思います」と、「Dignity」のねらいを語る。

同校の総合学習は週1時間。授業は12〜13人の総合学習担当教師が行う。「担任が指導する案も検討しましたが、他校の実践事例から、一気に学校全体に広げようとする、足並みをそろえるのが難しくなると考え、有志の先生方で指導にあたることにしました」と、柳瀬先生は説明する。毎年メンバーの入れ替えがあり、現在、全教師の4割程度が「Dignity」の授業を行えるところまで来ている。どのような研究テーマにも対応できるように、ほぼ全教科の教師が担当メンバーに入っている。

1年次はテキスト批評で論理的な文章を作成する力を育成

1年次はテキスト批評を通して、レポートや論文を書くための基礎力を身につける。最初に簡単な文章を読んで、ピラミッドストラクチャー（書かれている問い、それに対する筆者の主張と根拠を構造的に整理する手法）やパラグラフライティングの手法を使い、論理的な文章を書く練習を行う。その上で、社会問題をテーマとしたブックレットから1冊を生徒が選んで要約・批評を行い、グループ単位で批評文を作成・発表する。

「今の生徒に足りないのは文章を読解する力。ブックレットは本格的な論文ではありませんが、必ず筆者の問題意識に基づく問いと主張、その根拠が述べられています。課題から具体的な研究へどのようにアプローチしていくのか、ブックレットを通して理解させるとともに、論理的に文章を読む力・書く力を身につけさせたいと考えました」（柳瀬先生）

グループ活動では、筆者の問い・主張・根拠を読み取り、それらを共有した上で、各自で作成した批評文

図1 リサーチエスチョン演習

No.10

学年	科目	番号	名前

リサーチエスチョン演習1

目標：検証可能なリサーチエスチョンを立てることができる。

研究の条件

- ① 研究結果の発表は2016年12月第2週です。
- ② 調査は校内で終わらなければなりません。

1. 研究テーマを選びましょう。

（研究テーマの例）
① 読書教育「ファクション」 若者にとっての意義
1人、1つずつ研究テーマを書きましょう。
グループで討論した上で、グループの研究テーマを決めましょう。

2. テーマが近い近いの候補を各自で書きだしましょう。No.9のプラントを参考にしましょう。（個人のアイディア）

3. 各自のアイディアを共有し、グループで討論した上で、グループとしてのリサーチエスチョンを設定しましょう。

4. グループで仮説を考えましょう。

--

5. 仮説を検証するために必要な調査（小さな問い）を、疑問形で書きだしましょう。
最初は個人で考えて書いてください。その後、グループで共有していきましょう。

6. 設定したリサーチエスチョンは、決められた研究条件の中で検証可能なかどうかをグループで判断する。
検証できないと判断した場合は、仮説をもう1つ設定し直し、リサーチエスチョンをつくり直します。

--

*学校資料をそのまま掲載。

を持ちより、グループで完成させる。そして、導入・要約・批評から成るプレゼンテーションをクラスで行い、

クラス代表が学年全体で発表する。クラス審査は審査項目に基づいて生徒同士で行う。審査項目は、要約

や批評の要点が簡潔明瞭か、著者の問いが明確に示されているか、自分の意見とその根拠が明確に述べられているかなどだ。「他グループの審査を行うことで、よい要約や批評、プレゼンとは何かを学ぶ機会になっている」と、長屋副校長は指摘する。

「大きすぎる問い」を提示し、あえて失敗を経験させる

2年次は生徒が各自で「問い」（リサーチクエスト）を立て、その解決に向けて探究活動を行う。まず、研究の手順を学ぶためにミニリサーチ演習を行う。ここでは、「テレビ番組の種類と曜日・時間帯には、どのような関係があるか」といった身近な問いを通じて、資料検索や情報整理などの方法を学ぶ。

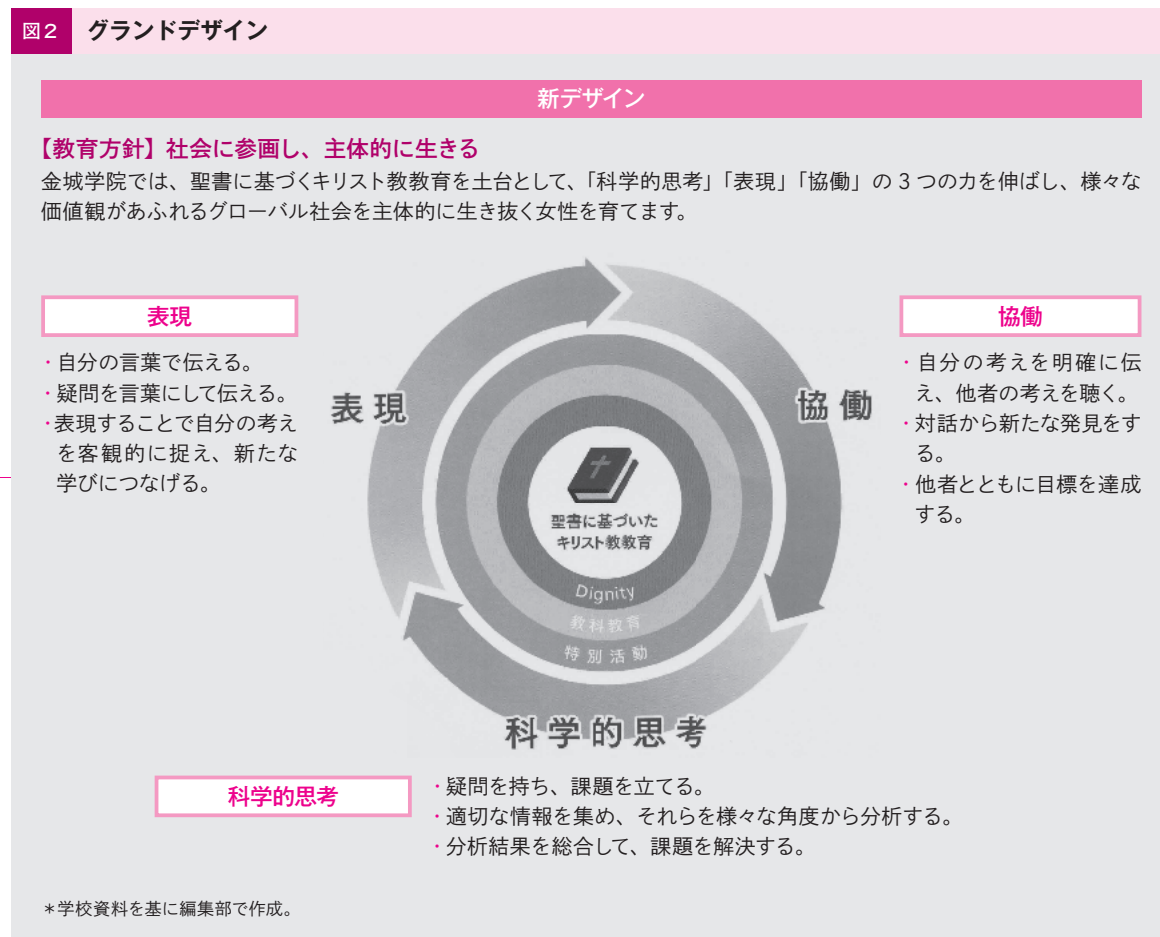
続いて「問い」の設定の仕方学ぶ。ユニークなのは、練習のためにあえて「大きすぎる問い」を提示し、失敗させるためのワークを実施している点だ（図1）。生徒は4、5人のグループになり、「ファッション」「若者ことば」「少子化」などから興味

あるテーマを選ぶ。初めに自分たちで調べたいこと、知りたいことを仮の問いとして挙げ、それに対して社会的な背景・経緯・現状・信憑性など様々な角度から検討を加える。

次に「問い」に対する「仮説」を考え、検証するための「小さな問い」（「仮説」を検証するために必要な調査）を書き出し、さらに「仮説」を振り返る作業を経て研究対象となる「問い」を絞り込んでいく。このプロセスを経ることで、「問い」を焦点化しなければ適切な仮説やその検証方法を導き出すことができないことに気づかせるのだ。

この時、教師は机間巡視をしながら、各グループにアドバイスを与えていく。発足以来のメンバーである山崎貴美先生は、「調査項目や方法が多く、研究の途中で困難が予想されるような場合は、『本当にできるの?』と問いかけ、もう一度、『問い』や『仮説』に立ち戻り、それらが適切かどうかを考えさせるようにしています。机間巡視の中で主体的に考えることができたグループは、ある程度うま

図2 グランドデザイン



くいますが、教師の言われるがままにワークシートに取り組むだけのグループは本質的なところまで理解できません。『問い』を設定させる難しさをいつも感じています」と語る。

一連の学習が終わった段階で、2〜4人のグループを組み、本格的な探究に向けて、1学期中に仮の「問い」の設定までを行う。夏季休業中に研究領域に関する資料を読んでその報告書を書き、2学期からは「問い」「仮説」「調査方法」を設定してグループ研究に取り組む、最終的にクラス発表・全体発表を行う。

続いて、3年次に取り組む小論文のテーマを2年次の3学期中に決め、3年次の1学期間で書き上げる。テーマは自由だが、ほとんどの生徒が自分の将来の志望に近いものを選び、これが事実上の卒業論文となる。

21世紀型学力の育成に向けて 全校でグランドデザインを改訂

16年8月、同校は「Dignity」の立ち上げ以来、8年ぶりに学力育成のグランドデザインを改訂した。「知識・理解」「価値・態度」「活用力」を「科学的思考」「協働」「表現」に改め（P.

17図2）、教科教育や特別活動などあらゆる教育活動で3つの力を育成することを確認した。「08年当時と比べて、21世紀型学力に関する私たちの知識も増え、改めて次期学習指導要領に対応できるグランドデザインを作成しようと考えました」と柳瀬先生はそのねらいを語る。

新たなグランドデザインの策定は、15年度の夏季休業中の5日間をかけて行われた。校長の呼びかけに応じて多くの教師が議論に参加した。参加者は授業で感じる生徒の課題、育てたい力、生徒の強みや弱みなど、思いつくキーワードを自由に出し合い、図に整理した。さらに、それらを一覧表で集約した。

そのような検討のプロセスを採ったのは、学校全体で取り組んでいく意識を醸成するねらいがあったと、長屋副校長は明かす。

「従来の学力観は有志の教師がまとめたものだったため、必ずしも学校全体に浸透していませんでした。多くの教師が議論に加わることで、育成したい力を共有し、当事者意識を持って取り組んでもらいたいと考えました。たとえば、自分の意見が直接

反映されなかったとしても、自分も議論の場にいた、発言したという思いがあれば、取り組みへの意識も変わってくるのではないだろうか」

「Dignity」を通じて 大学で必要なスキルを習得

「Dignity」の開始から約10年。学んだ研究・発表のスキルが、大学で役立っていると感じる卒業生は多い。山崎先生は「ゼミでプレゼンを行う時、戸惑うことなく準備を進めることができる」と、多くの卒業生が言います。本校の卒業生がリーダーシップを発揮しているという声は、大学の先生方からも伺います」と語る。

入試とのつながりを実感する教師も多い。企画広報担当で進路指導課の中山大輔先生は、「『Dignity』で学んだプレゼンの手法や研究内容に関する知識が、推薦・AO入試の小論文や面接で役立ったという生徒は少なくありません。『Dignity』で身につけた力が入試にも生かされるという実感を、多くの先生方が持っていると思います」と力を込める。

個人レベルで「Dignity」のノウハウを踏まえた教科指導が実践され始

めたのも大きな変化だ。英語科の水野志帆先生は「授業では『Dignity』の1年次で実践しているパラグラフライティングや要約の手法を取り入れています。今後はほかの先生方や他教科と連携しながら授業案をつくっていくことも視野に入れていきたいと思っています」と抱負を語る。

「Dignity」の担当者が、ほぼ全教科に及ぶことから、教科横断で情報交換する機会が増えたことも大きな収穫だった。「Dignity」を始めてから、職員室でも教科を超えて情報交換がなされるようになりました。探究学習の話題を通して、他教科の教師の知識や発想に触れることにより、私たち自身も視野を広げることができました」（長屋副校長）

一方、課題は、「Dignity」で育成する3要素を教科や教科外活動でも育成していくことだ。企画広報担当でカリキュラム研究部の山内麻記子先生は「『Dignity』で育成している思考力や表現力、主体的な学習態度は、あらゆる教科に必要な力だと思っています。しかしながら、生徒自身がそのつながりを実感するまでには至っていないのが実情です。各教科で育ま

れた知的好奇心と『Dignity』を結びつける仕組みを構築していく必要があると考えています」と語る。

その一環として、同校では教科の授業の中で「問い」を見つける仕組みを模索している。現在検討しているのは、各教科で生徒が疑問に思ったことや知識・理解を深めたいと思った事柄を、その都度生徒が専用ノートに書き留め、「Dignity」の授業で「問い」を立てる際に、そこからテーマを選ぶという仕組みだ。疑問や関心を持った事柄を書き留め、分類することで、自分が気づけなかった興味や適性が見えてくるとの期待もある。

もう1つの課題は、「Dignity」の成果を客観的に測る評価方法の開発だ。現在、ブランドデザインに沿ったルーブリック作成の真ただ中にある。「情緒的なつながりが従来の日本の教育の特徴でしたが、グローバル社会では日本的な価値観だけでは通用しません。教育を科学的に捉える視点を養うことで、学校全体の教育力をさらに高めていけるよう工夫していきたいと思っています」（柳瀬先生）

キャリア教育における探究学習

島根県立江津高校

キャリア教育の中に探究学習を位置づけ、社会における自分のあり方を深く考える

島根県立江津高校では、2015年度より「KAWARAプロジェクト」と称し、地域の強み・弱みを考える探究学習を推進している。16年度からはベネッセの「進路サポート」を導入してキャリア教育の基盤とし、その流れの中に探究学習を位置づけ、指導の体系化、教師の負担軽減を図っている。

「KAWARAプロジェクト」で地域に根差した探究学習を開始

島根県立江津高校は、島根県中部の日本海に面する江津市にある小規模校である。人口減少や産業衰退が進む地域の実情を踏まえ、地方創生を担う人材育成を目標に掲げて、2013年度から3年間、「総合的な学習の時間」を利用した「Career Education」(GCE)と称するキャリア教育を展開してきた。

15年度、前任校で探究学習を主導してきた門脇勤先生が赴任したのを機に、同校は探究学習の再編に乗り出す。取り組みの理念を明確化する

ために、地域の地場産業である石州瓦にちなんで「KAWARAプロジェクト」という探究学習を、1年生でスタートし、より生活や地域に根差したキャリア教育を目指した。

「キャリア教育は、狭い意味での進学先選択や職業選択にとどまらず、社会の中での生き方、あり方を学ぶものだと考えています。そのため、地域の課題を探究していく中で学んでいくことが、身近でリアルティがあると考えました。瓦は一見、家や家具など目に見えるものだけを守っているように思いますが、実はその下には人々の生活や喜怒哀楽といった目に見えないものもあり

島根県立江津高校

永岡徹郎 ながおか・てつろう

教職歴20年。同校に赴任して3年目。進路指導部長。「生徒とともに歩みたい」

島根県立江津高校

門脇勤 かどわき・つとむ

教職歴16年。同校に赴任して2年目。キャリア教育地域連携推進グループリーダー。「どんな時代でも、挑戦し続ける人を育てたい」

島根県立江津高校

◎「思慮・高邁・貫徹」を校訓に地域・社会を幸せにする力を培う。13年度から3年間「地域でつなぐキャリア教育モデル事業」の指定を受けた。

◎設立 1958（昭和33）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約70人

◎2016年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、和歌山大、島根大、山口大、島根県立大、山口県立大に12人が合格。私立大は、京都精華大、摂南大、岡山理科大、広島文教女子大、広島工業大、福山大、徳山大、四国大、徳島文理大、福岡大などに延べ29人が合格。

◎URL <http://www.gohsu.ed.jp/>

ます。探究学習を通して、そうした目に見えない大切なものや課題に気づき、それを守ったり改善したりする経験を積んでほしいと思います」と門脇先生は語る。同校のキャリア教育にはもう1つ課題があった。探究学習やインターンシップ、

地域人材による講演会など個々の内容は優れているものの、取り組み相互の関連性が薄く、すべて単発の取り組みに終わっていたのである。進路指導部長の永岡徹郎先生は次のように述べる。

「GCE全体を通してどのような生徒を育てたいのかが見えにくかったのが最大の課題でした。地域の課題を知り、その解決策を考えることで、社会とのつながりを実感し、自身の進路を主体的に考えてほしかったのですが、日々の学習に熱意を持って取り組むような成長は見られませんでした」

そこで16年度、同校はキャリア教育の体系化を実現するために、学校の方針とコンセプトがほぼ一致しているベネッセの「進路サポート」を導入。メイン教材である「進路探究ワーク」を軸としたキャリア教育の一環として「KAWARAプロジェクト」も位置づけられることとなった。

地域の課題について考える 経験が人生の土台になる

同校のキャリア教育の最大の特徴

図1 キャリア教育の流れ（1年次）

平成28年度 キャリア教育のベースとなる学び 進路探究ワーク 1（1年生用）

学期	日付	曜日	時間 (分)	探究 ステップ	テーマ	ねらい	備考
1	4月19日	火	50	課題設定	A 進路探究を始めよう	なぜ進路探究が必要なのかを知る 進路探究をする上で大切なポイントを知る 今の自分を知り、高校生活で取り組みたいことの目標を立てる	・新入生宿泊研修の事前研修で実施
	4月26日	火	50	情報収集	B 自分のことをもっと知ろう	将来の進路を考えるためには、自分を理解することが大切だと知る 自分を理解するために、強みを見つける方法を知って、実践できるようになる 自分の強みを将来どう生かしていきたいかイメージできるようにする	・新入生宿泊研修2日目に実施
	6月21日	火	50	情報収集	C 変わりゆく社会とのかかわり方から職業・学問を探究しよう	社会が変化する中で、職業・学問も変化してきたことを知る 社会にはいろいろな課題があり、それぞれに職業・学問がかかわっていることを知る 自分たちが生きる社会は、自分の力でよくしていくことができることに気づく	・6月に 保育所実習（家庭科）
	7月6日	水	50	情報収集	D 社会と“私の”かかわり方を考えよう	社会の課題を解決するためには、様々なかかわり方があることを知る 自分の進路についても、社会とどうかわるかという視点で、考えられるようになる 自分が学びたい学問／働きたい職種・業種の候補を挙げられるようになる	・7月26日（火）に GCE KAWARAプロジェクト～江津市の強みと弱み講座～を実施（江津市総合戦略） ・学園祭初日に GCE KAWARAプロジェクト～ポスターセッション～
2	9月13日	火	50	整理・分析	E 様々な観点から文理選択を考えよう	文理選択において大切なポイントを理解する 自分の文理選択について複数の観点から考える 自分の選択について選んだ理由が語れるようになる	・9月に 福祉施設実習（家庭科） ・10月19日（水）に キャリア教育講演会 ・10月 or 11月に 島根大学訪問を実施予定
	10月18日	火	50	整理・分析	F 経験を振り返り、これからの進路を考えよう	これまでの高校生活でどんなことを学んだのかを振り返る 進路について今考えていることを整理する これからの高校生活でどんなことに取り組んでいきたいか考える	
3	12月13日	火	50	まとめ・表現	G 人に伝える文章の書き方を身につけよう	意見を伝える時には、そう考えた理由を示すことが必要だと分かる 説得力のある理由を示すためのポイントについて理解し、実践できるようになる	
	1月24日	火	50	まとめ・表現	H 探究してきた進路について整理しよう	進路探究チェックに取り組み、進路探究への取り組み度合いを確認する 進路探究レポートに取り組み、将来取り組みたいことや卒業後の進路について述べる	・進路探究チェックと進路探究レポートを提出すると、進路探究の記録（生徒個人表）が返却される
	3月15日	水	50	まとめ・表現	I 学びを振り返り、今後の目標を立てよう	「進路探究の記録」を用いて、1年間の進路探究の取り組みを振り返る 今後に向けて伸ばしていきたい観点を挙げられるようになる 今後取り組みたいことが具体的に決められる	・3月に GCE KAWARAプロジェクト発表会

* 学校資料を基に編集部で作成。

は、「進路探究ワーク」（図1）の探究のステップに沿って学校内の進路行事を再編し、これまで単発的に行

われていた個々の取り組みのつながりを意識した指導としたことだ。進路探究の必要性を感じさせるこ

とから同校のキャリア教育はスタートする。4月の新入生宿泊研修で「進路探究ワーク」の使い方、進路探究

のポイントなどを知り、高校3年間の目標を立てる。その上で、自分のことを理解する大切さを知り、自分の強みを見つける方法、それを将来にどう生かすかを考えさせる。

6月は「変わりゆく社会とのかかわり方から職業・学問を探究しよう」をテーマに職業・学問に対する理解を深め、自分の進路と社会とのかかわりについて考える。これと併せて保育所実習を実施し、働くことの意味を実地で経験するとともに、翌月の講演会への参加を見据え、外部講師を招いてインタビューの方法やマナーを学ぶ。

7月は「社会と私のかかわり方を考えよう」をテーマに、「進路探究ワーク」で社会の課題を解決するためののかかわり方について学んだ上で、「KAWARAプロジェクト」として「江津市の強みと弱み講座」を実施。雇用の確保、定住化の促進、少子化対策といった、市が抱える課題の解決に向けて策定された「江津市総合戦略」の4つの基本目標・方針（「しごとづくり」「ひとのながれ」「結婚・

出産・子育て」「まちづくり」）について、市が推薦した11人（9ブース）の講師による講演・質疑応答を行う。生徒はグループに分かれて各ブースの話を聞き、学んだことや考察したことをポスターにまとめ、2学期初めの学園祭でグループ発表を行う。

地域の課題をテーマに据えたのは、卒業後、江津市を離れたとしても、その体験が生徒がそれぞれの人生を生きていく上での土台になると考えたからだ。「よりよいコミュニティ」を構築する力は、どのような地域・職場であっても必要です。江津市の課題はあくまで学びの素材に過ぎません。地域の課題に気づき、それを解決しようとするのが、人生をたくましく生き抜く原点になると思います」と門脇先生は語る。

教師のサポートなしで「進路探究の記録」を作成

9月は文理選択に向けて、選択のポイントを学び、選択理由について考えるために、福祉施設実習や識者を招いてのキャリア教育講演会など

を実施する。12月には「人に伝える文章の書き方を身につけよう」をテーマに、意見を伝える方法や説得力のある表現方法について学ぶ。

それらの経験を踏まえて、2学期の期末考査後から冬季休業にかけて、個人で取り組む課題研究のテーマを考える。テーマは「KAWARAプロジェクト」で学んだ内容、あるいは個人の興味・関心に応じた内容のいずれかで、担任のアドバイスを受けながら3学期初めまでに決定する。この時、担任は生徒の希望進路や文理選択の結果を踏まえ、「地域課題と自分の進路をつなげてみてはどうか」などとアドバイスを与えながらテーマを焦点化させていく。

すべての生徒のテーマが決まった段階で、学年主任と進路指導課が相談の上、学年団の担任・副担任に1人十数人の担当生徒を割り振ってレポート作成を指導し、生徒は3月の「KAWARAプロジェクト発表会」で口頭発表を行う。

ただし、16年度はこの口頭発表をなくし、「進路サポート」の提出課

題である「進路探究レポート」の提出に代える予定である。「1・2年次3学期の探究学習は、いずれも教師1人あたり十数人の生徒を担当していますが、生徒の人数が多く、きめ細かい指導ができていません。『進路探究ワーク』は、課題設定からまとめ・表現の方法まで体系立ててつくられており、教師のサポートがなくても生徒自身が自ら課題を見つけて、探究していく方法を身につけることもできます。1年次3学期のレポートは生徒に任せ、1学年の教師を2年生の指導に充てることで、指導を手厚くしていきたいと考えています」（永岡先生）

志望理由書の作成と課題研究のテーマをリンク

2年次は「自分は社会のために何ができるのか」をテーマに進路学習を進める。6月に、「進路探究ワーク」で自分がしたいこと、できることを整理し、目標実現のために今やるべきことを挙げられるようにする。続いて、上級学校での学習や企業での

仕事について学び、それを踏まえて7月の「課題探究講座」で3日間、計6時間をかけて個人の課題研究のテーマ設定の仕方を練習する。この講座では、島根県立大学の教員と学生を招いて、同大学のフィールドワークを参考に課題研究の進め方についてレクチャーを受けた後、「自分は社会のために何ができるのか」を土台とした上で、担任のアドバイスを受けながら研究テーマや計画を立てる。この時、生徒がテーマ設定でつまづかないよう、生徒一人ひとりと相談しながら詰めていく。

10月には、社会を知るためのインターンシップを実施する。江津市・浜田市・益田市にある大学や専門学校、市役所、医療センター、企業などを1日訪問して見学・職場体験を行う。その経験を踏まえて11月には、「進路探究ワーク」を使って社会で役立つ知識やスキル、自分のアピールポイントを社会で生かす方法について学び、仮の進路を考えて「志望理由書」を作成する。

それと歩調を合わせて、11月の期末考査後から、2年次3学期の課題研究の発表に向けた準備を進めてい

く。1年次同様、テーマが決まった段階で学年団の教師に担当生徒を割り振り、個人指導を行い、志望理由書の内容を踏まえて、将来の進路とリンクするような研究テーマについてまとめていく。3月には、プレゼンテーションソフトを使って、クラス内で研究成果を発表。生徒の相互評価、教師の評価、及び研究分野のバランスなども配慮しながらクラス代表を決め、代表者は「KAWARA Aプロジェクト発表会」で1・2年生に向けて研究成果を発表する。

キャリア教育の軌跡を ストックすることが重要

取り組んだ「進路探究ワーク」や「KAWARA Aプロジェクト」のアウトプットは1冊のファイルに蓄積していく。「自分の興味・関心、適性がどこにあるのか、本当にやりたいことは何かを知るためには、個々の取り組みを取り組んだままにするのではなく、生徒が振り返り、各取り組みでの気づきや疑問を関連づけていくプロセスが必要」と永岡先生は強調する。取り組みを蓄積していくことで、生徒は志望校決定や推薦・

AO入試の志望理由書を書く際に、高校時代の活動を容易に振り返ることができる。また、教師も、初めて受け持った生徒であっても、生徒の活動歴をすぐに把握できるため、進路指導をスムーズに行えるのである。

探究学習の評価も「進路サポート」の導入により容易になった。1年次最後のレポートや2年次の志望理由書が書けているか、「進路サポート」にきちんと取り組んでいるかといった点が評価のポイントになる。その際、課題認識が生まれた経緯、どのように課題を解決したのかといった思いが読み手に伝わる内容ほど高い評価を受ける。

授業や部活動で「問い」を 投げかけることが大切

「KAWARA Aプロジェクト」が始まって1年半。取り組みは緒に就いたばかりだが、「進路サポート」を軸としたキャリア教育の流れが整備されたこと、「進路探究ノート」によって生徒の活動を可視化できるようになったことが大きな成果だ。

課題は探究学習のレベルアップ、特に生徒自身が探究に値する「問い」

を発見する力を育成することだ。そのためには、教科の授業とのリンクが重要になると、門脇先生は語る。

「探究学習をレベルアップさせるには、日常の授業の中で生徒たちの知的好奇心を刺激するような『問い』を意識的に投げかけていくことが重要になると思います。すぐに答えを教えるのではなく、課題意識を持たせるような授業構成を考えなければなりません。そのためには、教師が共通認識を持って、教科の授業はもちろん、部活動や学校行事など、あらゆる場面で、生徒に揺さぶりをかけていくことが必要になるでしょう。『進路サポート』の活用が先生方目線合わせの第一歩になると期待しています」(門脇先生)

教師間の共通認識に基づいた教育活動全体での揺さぶりには、教師間で「育てたい生徒像」を共有し、各教科で進めているアクティブ・ラーニングの普及を加速させていくことが重要になる。当面は「進路サポート」の活用を通してキャリア教育に対する教師の目線合わせを進め、その後、研修会などを通して多くの教師を巻き込んでいく考えだ。

「探究学習」
開発・推進
追跡レポート

語り合い、考え抜き、創り上げる、

龍谷大学付属平安中学校・高校の新たな「学び」

創立140周年を迎えた今年度、校内にカリキュラム・マネジメント委員会を立ち上げ、教育活動のさらなる改善に取り組み始めた龍谷大学付属平安中学校・高校。探究学習についても、これまでに磨き上げてきたカリキュラムを土台に、2017年度からの新たな展開に向けて、校内で議論を重ねていくことになった。本誌では次号以降、同校の教師たちが、育てたい生徒像をどのように具体的に描き、自校に求められる探究学習を形づくっていくのか、その過程を随時レポートしていく。

探究学習を通じて育てたい生徒像

建学の精神を土台にした探究学習を目指す



校長 龍谷大学付属平安中学校・高校
寺岡 竜徳
すいど・かつり

本校では、浄土真宗の精神に基づき、ありのままの自分の姿を真摯に尋ね、相手の痛みが分かる思いやりの心を持った生徒を育てることを目指してきました。それはすなわち、相手の立場に立ち、周囲から何を求められているかを想像した上で、自分が何をすべきかを主体的に考えることのできる若者の育成です。

部活動でも学校行事でも、仲間との関係の中で自分の役割を考えられる人は、社会に出てからも活躍することができます。近年、教育のあり方が変わる中、授業でも、学びの過程の中で仲間を大切にすること、自分の役割を考えることが、より一層求められるようになりしました。アクティブ・ラーニングも、生徒が活発に活動する学びではなく、社会に出た時に、自分で物事を判断し、それを他者と

協働しながら進めていく力を育成する学びを目指すのだと私は考えます。それは、私たちが建学以来大切にしてきた理念と大いに重なるところがあり、これからの社会でも、ますます輝きを放っていくものだと思っています。

教師には、今自分が行っている教育活動が、生徒にどのような力を育成することに結びついているのかを、常に確かめることが求められます。探究学習も、教師が生徒を動かすことができるようでは、生徒に主体的に考える力を養うことができず、教師の自己満足に終わる恐れがあります。本校の探究学習は、生徒があらたに自分の自分を見つめ、自分自身を育てていく活動であるべきです。建学の精神はそこにも表れると思います。

それぞれの教師が授業や部活動、学校行事の中でこれまで体現してきた本校の教育理念をベースに、どのような探究学習を創り上げるのか、とても楽しみです。

探究学習の開発・推進に向けて

体系的な組織運営でコンピテンシーの育成を



校長補佐 龍谷大学付属平安中学校・高校
平井 正朗
ひらい・まさあき

目の前の事象について、背景知識を整理する論理的思考力と、そこから課題を発見し、解決する力。それらが社会で求められるコンピテンシーであり、そうした能力・資質を養う営みが探究学習だと考えます。

探究学習には、対話を通して深く学び、他者へ発信する2つのアクティブ・ラーニングが不可欠です。その1つは、イベントなどを利用して、課題の設定からまとめ・表現、振り返りまで、何か月もかけて学年全体で取り組むような学習活動であり、もう1つは、授業で学んだことを定着させ、実際に活用できるようにペアワークやグループワークを展開していく各教科における学習活動です。その2つのアクティブ・ラーニングを、カリキュラム・マネジメントを通じて、学校全体でバ

ランスよく行っていくことで、学力を伴った人間力を育成することができます。

「人の役に立ちたい」という気持ちを育むのと同時に、PDCAサイクルを通じてロジカル・シンキング・プロセスを鍛えることが大切です。教師は、生徒の自立を、授業、部活動、学校行事といった様々な教育活動を相互に作用させながら、実現していくことが求められます。同じように探究学習も、教科を横断した多様な知識をつなぎ、組み合わせながら、課題解決に取り組む生徒を育てていきます。だからこそ、本校でこれから取り組む探究学習も、トップダウンとボトムアップが融合した、より体系的な組織で開発・推進するものでありたいと考えます。

教師が日々の教育活動における成果や喜び、疑問や悩みを気軽に語り合える雰囲気をつくりながら、それぞれの指導が有機的に結びつく探究学習を創り上げていければと思います。

ハートを
こがせ!

Vol.10

埼玉県立上尾橘高校

東北支援ボランティア

震災を忘れないよう
自分で見て、感じた
ことを伝えていきたい

震災の年から毎年訪れ、 ボランティア活動を続ける

埼玉県立上尾橘高校が初めて東日本大震災の被災地でボランティア活動を行ったのは、2011年6月。「本校でも何かできないか」という生徒・保護者・教師の三者の思いが結実して、学校行事としての実施が決定した。仙台市に生徒36人が訪れ、個人宅のがれき撤去や汚泥除去を行った。以降、毎年夏に東北支援ボランティアを実施している。

今年は、7月末に16人の生徒が参加した。1年生から3年連続で参加している岡田夏実さんは、「作業はきついですが、少しでも被災地の役に立ちたいと思って参加しています。活動の合間に現地の人と話して、今どんな思いでいるのかを聞くことも、普段できない経験です」と、参加理由を語る。活動は、車中1泊2日の強行日程だ。深夜バスで移動し、活動場所の南三陸町に早朝に到着する

と、語り部と合流して、浸水したエリアを見て回る。津波がどれほどの高さまで来たのか、人々はどのように逃げ、また逃げ遅れて犠牲となってしまったのか。語り部は被災直後の写真を見せながら、「もし自分だったら、どうするのか考えてほしい」と語りかける。石岡拓馬さんは、大勢が逃げてきたという高台から、今は穏やかな海を見ながらこう思ったと言う。

「ニュースの映像などを見てはいましたが、実際に高台に立って、目の前にある海の水位が十数メートルも上がったとは想像が付きませんでした。この近くには小学校があったと聞き、当時の僕と同じ年の子が壮絶な光景を見たのだと思うと、どんなに怖かっただろうと感じました」

ボランティア活動とともに 現地に行く大切さを実感

今回のボランティア活動は農作業支援で、作業

教師の思い

やり遂げたという
自信を、次の挑戦に
結びつけてほしい



埼玉県立上尾橘高校
矢島茂樹

やじま・しげき
教職歴26年。同校に赴任して1年目。
教務部。英語科。

自分の意思で参加する 生徒の強さを感じた

本校ではこれまで、陸前高田市、気仙沼市、南三陸町を訪れ、がれきや汚泥の撤去、被災された方との交流などを行ってきました。毎年、20人前後の生徒が参加します。費用の多くは県とPTAの補助でまかなっていますが、生徒は数千円を支払う必要があります。そのため、保護者の負担は少なからずあり、自分の小遣いで参加する生徒もいます。活動では、そうした自分の意思で参加する生徒の強さを感じました。現地での作業は選べませんし、環境が厳しい中での作業です。それでも、途中でやめてしまう生徒は1人もおらず、互いに励まし合い、全うしていました。

私自身、このようなボランティア活動に



成長したネギの収穫は重労働だ。「人手が足りないため、ボランティアの力は重要ですし、復興のためにも、南三陸町に実際に来てくれるファンを増やしたい」と、畑のスタッフは話す。この畑は津波の被害を免れた里山地区にあり、地域活性化のために様々な活動が行われている。

は2つの班に分かれて行われた。1班はネギ収穫だ。7月末はネギの出荷最盛期で、ビニールハウス一面に青々としたネギが成長していた。商品を傷めないよう、根元の土を取り除いてから1本ずつ引き抜き、数十本まとめてからトラックに運ぶ。この日の天候は曇りだったが、ハウス内は蒸し暑い。「水、飲んだ?」「この量なら運べる?」などと、生徒たちは声をかけ合いながら次々と収穫していく。もう1班の作業は、畑での雑草除去だ。放っておけば雑草はどんどん大きくなるため、こまめな除去が欠かせない。広い畑をメンバーで分担し、畝の間の雑草を根から刈り取っていった。約3時間の作業だったが、スタッフからの「ありがとう」という言葉に、生徒は達成感に包まれた。

岸本水希さんは活動翌日、部活動で友人に感想を聞かれ、「大変だったけれど、よい経験になったよ」と、被災地で見えてきたことや活動の様子を伝えた。「来年は参加してみようかな」と言う友人に、思いが伝わったようだったと言う。

2学期の始業式では活動報告会を行い、10月に行われる文化祭では、昇降口に活動内容と生徒の感想をまとめたパネルが展示される。今回のリーダーを務めた千葉治郎さんは、2回参加して、現地に行く大切さを改めて感じたと話す。

「語り部の話は初めて聞くことが多く、復興の様子を実際に見て実感できることができました。この活動が続いてほしいから、そのために現地で見たこと、感じたことを後輩に伝えたいと思います」

千葉治郎

ちば・じろう

3年生。リーダー。参加は2回目。生徒会長。陸上部前部長。

岡田夏実

おかだ・なつみ

3年生。参加は3回目。

石岡拓馬

いしおか・たくま

2年生。参加は2回目。陸上部部長。

岸本水希

きしもと・みずき

1年生。初参加。バレーボール部。体操部。

参加したり、被災地を訪れたりしたことは今回までありませんでした。そうした活動があるを知っていても行動に移せていなかったのですが、生徒は自分の知らない世界に関心を持ち、一歩踏み出しました。そして、大変なこともやり遂げ、相手に感謝されました。そうした経験を自信にして、学習や部活動などで厳しい状況に置かれても挑戦し続ける人材になってほしいと思います。

本活動を始めた教師が異動して、今回は、本校に赴任してすぐの教師が活動の引率を務めました。参加者は活動を有意義に感じています。参加者は活動の状況の変化に応じて、教師も生徒も活動の意義を見直す必要があると思います。生徒のさらなる成長につながる活動にしていきたいと考えています。

埼玉県立上尾橋高校

◎教育目標は、「地域に根ざし、生徒一人ひとりを伸ばし、自立(律)して社会を支えられる人間を育てる」。1年生の就労体験活動、地域の無形民俗文化財「どろいんきょ」の有志参加など、体験学習を重視している。また、1学年2クラスの情報コースを擁し、簿記や情報処理などの様々な資格取得にも力を入れる。

◎設立 1983(昭和58)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 約490人

◎2016年度進路実績(現役のみ)

四年制大学は、城西大、聖学院大、大東文化大、東海大、東京国際大、鶴見大に6人が進学。短期大学5人、専修・各種学校43人。就職50人。

◎URL <http://www.ageiichihana-h.spec.ed.jp>

授業を進化!

思考を深化!

実践 アクティブ・ラーニング

現代文

過去の学習内容と行き来する
活発な議論の中で、
深い読解を実現する

14:15 本文を通読する



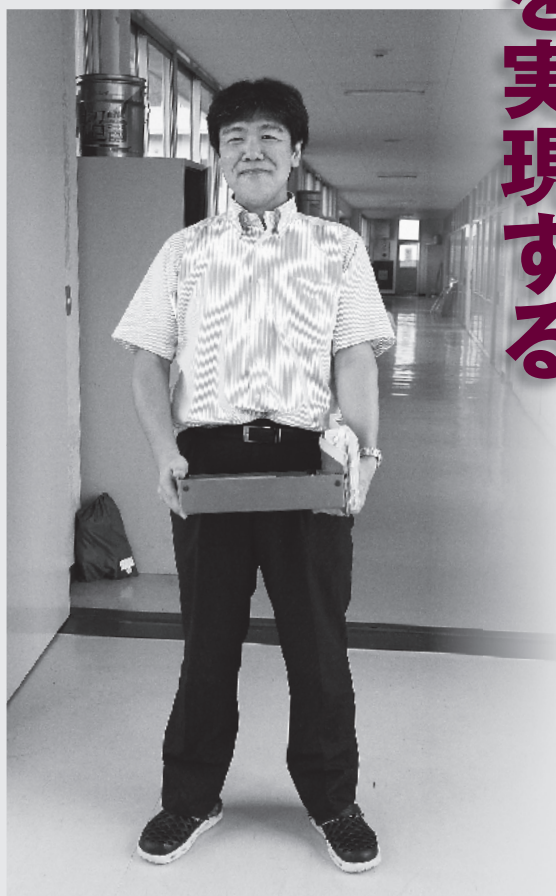
段落ごとに生徒が交替しながら、本文全体を音読する。全26段落を10分程度で通読完了。『「筆者は何を主張したいのか」を説明してほしいのだけれど、考えを整理するのに何分必要?』と黒川先生から尋ねられた生徒が「3分ください」と返事。クラスの全員がまず自分で考えて、それからペアで話し合った。

●1年生「現代文」の授業。情報学者で東京大学名誉教授の西垣通氏の「ネットとリアルのあいだ」を、この授業から全4時間で読み解いていく。1回目の今回の授業は、本文全体を通して読み、筆者の主張を読み取ることを目指す。(P.29に授業デザインを掲載)

「生徒の議論」が中心の授業で 教師は論点の整理に徹する

1年生の現代文の授業で、黒川治彦先生が実践するのは、過去の学習内容と関連させながら、より深く、多角的に読み解いていく学習だ。9月上旬に行われたこの授業では、教科書の評論の内容を深く理解するために、夏季休業中に課した評論の読解問題が、思考を活性化するツ

黒川先生のアクティブ・ラーニング



栃木県立宇都宮高校

黒川治彦 くらかわ・はるひこ

教職歴19年。

同校に赴任して11年目。1学年担任。

アクティブ・ラーニングの実践は20年目になる。

栃木県立宇都宮高校

◎剛毅で高潔な人物の育成を目指す「瀧の原主義」に基づき、「全教科主義」「学業プラスワン」を実践。自己実現を果たせる高い知力・豊かな情操を養い、社会のあらゆる局面で課題解決を図れる資質を備えた人材を育成する。

◎設立 1879(明治12)年

◎形態 全日制・通信制/普通科/男子

◎生徒数 1学年約280人

◎2016年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、東北大、東京大、東京工業大、一橋大などに118人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、早稲田大などに延べ263人が合格。

◎URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/usunomiya/nc2/>

夏季休業中に課した評論の読解問題のプリントを生徒に返却。「夏季休業中に読んだ評論で、教科書の評論と関係するものが思い浮かぶかな?」と問うと、約3分の1の生徒が挙手したので、夏季休業中の課題を3分ほどで見直しさせた。そして、教科書の評論と関連しそうな内容をグループで確認しながら、筆者の主張を改めて検討した。

指名された生徒が前に出て、重要なキーワードを板書しながら、筆者の主張を説明。聞く側の生徒は、説明の納得度を拍手の大きさを評価する。黒川先生は、小さな拍手だった生徒にその理由を聞くと、「自分が重要だと思った語句が盛り込まれていない」などと理由を述べ、協働的な深掘りが進んだ。

ルとして使用された。

授業では、生徒が段落ごとに教科書の本文を交替で音読し、全体を通読。その後、黒川先生は生徒に「筆者の主張は?」と問いかけた。指名された生徒が説明すると、ほかの生徒から「今の意見では、教科書に書いてあることをなぞっただけでは?」「重要なキーワードは盛り込まれていないけれど、うまくつながっていない」などの指摘が入る。その度に、黒川先生が「みんなはどう思う?」「この言葉は外せないようだね」などと、論点を整理し、発表者と聞く側の生徒を橋渡ししながらクラス全員の読みを深める。

そうして、筆者の主張をつかむために正確に理解するべきキーワードを確認したところで、授業は大きく展開する。夏季休業中の課題として取り組んだ評論を、教科書の評論を深く読み解くための材料として、並行して読み比べていくことになったのだ。「ここまでに出てきたキーワードを念頭に、夏季休業中に読んだ評論をもう一度ざっと確認してみよう」という黒川先生の言葉で、生徒たちは教科書の評論と夏季休業中に取り組んだ評論を読み比べ始めた。

「1つの物事を考える時に、あえて別の角度から考えることが大切であると、本校ではすべての教科の中で生徒に訴えています。ですから生徒も、複数の評論を並行して読む意味を十分理解しています。そうした授業を続けていくと、2、3年生になった時、『今日の授業に関連して、

自分が前に読んだ本の中にこんなことが書かれてあった』など、教科書に限定することなく、生徒が率先して過去の学びを持ち出し、自由に議論できるようになります」

複数の評論を読み比べ、 語り合いの中でさらに理解を深める

教科書、そして夏季休業中の課題と複数の評論を照らし合わせた生徒たちが、グループでの議論を経て、さらにクラス全体での討議を続けた。「自薦でも他薦でもよいので、どんな意見を出していこう」と黒川先生が呼びかけると、それに応じた生徒たちが「ネット社会で内面的なものがないがしろにされているという主張が、この2つの評論に共通している」「この評論での『内面性』と、この評論での『身体性』は、言葉の印象は違うけれど、実は同じ意味なのでは?」「この2つの評論では、『身体』という意味が全く別の意味で使われている」などと意見を出し合う。別の角度からの読みによって、理解が一気に深まっていく。

授業の佳境とも言えるおよそ十数分間、黒川先生は、生徒の意見を整理し、議論を促進することに徹する。明らかに文を読み間違えた意見が出た時も、即座に否定せず、ただ整理してその意見を全員に提示する。すると、ほかの生徒から「それは違うのでは?」と指摘が入る。

「教師が正解を言えば、『先生が言うのだから

黒川先生が「評論を読む意味は、そこで理解した視点や考え方を、別の場面で使えるようになること」など、現代文の学びの普遍的な意味を生徒に語る。残り1分程度で、生徒が教科書と夏季休業中の課題を突き合わせながら、自主的に今日の学びを確認し合った。

数人の生徒が、複数の評論を読み比べたことで分かったことを踏まえて、教科書の評論の筆者の主張を発表。黒川先生が「今の指摘はとても重要。では、夏季休業中の課題の中に、別の視点でアプローチしている評論がなかったかな?」と、さらにグループでの議論を促す。それらを踏まえて、最初に発表した生徒が再び内容を整理した。

思考の活性化・深化への配慮

生徒が自分で気づくための最小限の問いを追究

アクティブ・ラーニングの根本は言語活動だが、だからといって、グループワークありきではないと黒川先生は考える。

「大切なのは生徒が能動的に、深く考えることです。それが実現できるのであれば、講義形式の授業でも構わないでしょう。ただ、生徒が自分の考えが深まったことを確認する絶好のアウトプットの場合、グループワークであることは事実です」

思考の活性化につながるグループワークの実現には、教師の役割がより一層重要になる。

「分かっしてほしい」という教師の思いが強すぎると、生徒が理解していることまで説明してしまい、結果、生徒の授業に対する熱を冷ますこととなります。生徒は自分で考え、自分で語り、そして認められたいのです。生徒の考えを引き出すため、教師の問いは最小限にとどめる。今回の授業でもたくさん我慢しました」

今回の授業で、キーワードの1つである「コ

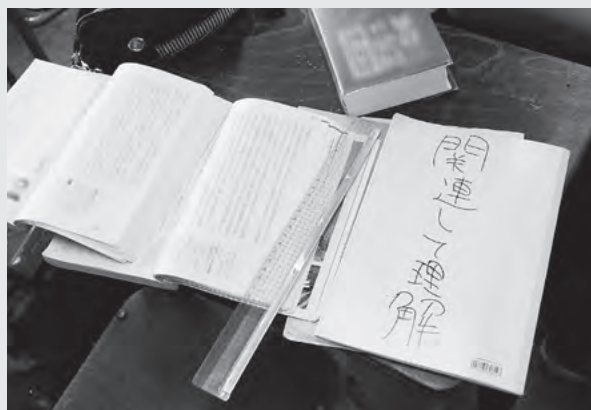
間違った」と生徒は考えることを止めてしまいます。しかし、生徒同士であれば、本当に正しいかどうか、最後まで気が抜けません。生徒に議論を任せるからこそ、学びが深まるのです」

場づくりへの配慮

間違った答えの価値を生徒に理解させる授業力が求められる

生徒主体の議論を授業の中心とするために

「コミュニティー」に迫る場面で、ある生徒が人間の存在を「精神と身体から成る」と説明した。そこで黒川先生が問う。「それは自分1人でつくられるもの?」。生徒が「いいえ。周囲に影響されながら……」と答えた次の瞬間、ほかの生徒たちが思わず「ああ……」と声を漏らした。まさに、最小限の問いかけで生徒の思考が活性化したのだ。



黒川先生は、授業中に「学びの意味」をよく口にする。この日、先生が語った「異なるものを関連させることで、多角的に考え、深く理解できる」というメッセージに共感したある生徒が、その言葉を自分のノートの裏に大きく書いていた。

授業デザインシート

【教科・科目】国語・国語総合（現代文）

【分野・単元】評論

【テーマ・作品】「ネットとリアルをあいだ」（西垣通）

【設定時数】4 時間中の1 時間目

【本時全体の目標】筆者の意見を捉え、多角的に考察する

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
本文を音読する	「言葉」に気をつけて、正確に読む。	・技能	【教師】声の大きさや速さに留意する。 【生徒】正確に音読する。	キーワード・キーセンテンスに留意しながら、内容を正確に捉えて読むよう働きかける。	声の大きさや本文に向かう姿勢。
本文の内容を考える	「言葉」を適切に理解し、文脈に即して、筆者の主張の核を把握する。	・思考力 ・判断力	【教師】まずは、自分でしっかりと考えるよう伝える。 【生徒】線引きや図示など、自ら工夫してまとめる。	生徒自身で時間を区切り、集中して考えるよう働きかける。	本文のどの辺りに気を配りながら考えているかを、観察する。
本文の内容を発表し、評価を受ける	「言葉」を適切に理解し、文脈を押さえて筆者の主張を的確に把握する姿勢を、生徒からの評価により養う。	・思考力 ・判断力 ・表現力 ・主体性	【教師】生徒による評価が適切になされるよう進行する。 【生徒】発表内容について確固たる根拠に基づき、自分の考えで評価を行う。	発表内容についてどのような評価をし、その理由は何のような根拠からかを明示させる。また、根拠を持って評価するよう促す。	発表者の態度や内容について間違っている場合、頭ごなしに否定せず、なるべく生徒同士の発言で解決するよう仕向ける。
読み比べを行う	既読の文章（複数）に改めて触れ、自らが蓄えた知識や教養と関連させて、教科書本文を思考することの面白さを実感する。	・知識 ・思考力 ・多様性	【教師】夏季休業中の課題として既に取り組んだプリントを返却し、個人の記憶を呼び起こす契機とする。 【生徒】自分で考えた跡を振り返り、教科書本文の内容と照らし合わせる。	筆者の述べている内容との関連について、共通する点や異なる点、発展している点などについて考えるよう働きかける。	本文を考える上でキーとなる多様なワードについて、生徒から引き出し、すべてを黒板に書いておく。
読み比べた内容についてグループで話し合う	論理的に文章と文章とを関連づけ説明し合うことで、教科書の本文の読みを深める。	・知識 ・思考力 ・表現力 ・多様性 ・協働性	【教師】机間を巡視し、話し合いの内容・進捗について確認する。 【生徒】4人グループで内容について話し合う。	筆者の述べている内容との関連について、共通する点や異なる点、発展している点などについて根拠を持って話すよう働きかける。	本文中に根拠を求め、センテンスを抜き出させるなどして話し合わせる。
読み比べた内容について発表し、評価を受ける	読み比べ、話し合ったことで、読解上焦点をあてた視点(キーワード)から、比較した文章と教科書本文の内容を適切に関連づけて発表する。また、その発表に対し、自らの考えを持って適切に評価する。	・思考力 ・表現力 ・多様性 ・協働性	【教師】司会に徹する。 【生徒】主体的に意見を述べる。	意見を整理しながら、内容が誤っていても教師が答えを提示することはせず、改めて生徒同士で考えるよう働きかける。	生徒の着眼点、そこから考えるべき課題を見て取り、クラスの全員が自己の課題として考えるような雰囲気をつくる。
発表で問題となった点についてグループで話し合う	話し合いを通して、深く内容を理解する。	・思考力 ・表現力 ・多様性 ・協働性	【教師】机間を巡視し、話し合いの内容・進捗について確認する。 【生徒】4人グループで内容について話し合う。	文章内容に照らし、根拠を持って話し合うよう働きかける。	本文中に根拠を求めて話し合っているかを配る。
話し合いを踏まえ、改めて考えを発表する	自らの思考の深まりとその過程について確認する。	・思考力 ・表現力 ・協働性	【教師】生徒の読み取った内容の変化について整理する。 【生徒】発表内容の変化について過程を明確にして発表する。	状況によっては、思考が変化した過程についての説明を求める。	生徒の発表に集中し、その変化を適切にピックアップする。
まとめる	思考を継続する。	・思考力 ・表現力	【教師】生徒の変化を踏まえ、発問をしながら本時の授業内容を整理し、次時の内容につなげることで、思考の継続を促す。 【生徒】発問に対する自らの考えを述べる。	生徒の気づきを大切にしようという発問を心がける。	生徒たちの現状を踏まえ、長期的な学習活動における本時の位置づけについても触れる。

*黒川先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

も、入学後1か月くらいでの授業の雰囲気づくりが重要だと黒川先生は説明する。

「本校の生徒は、プライドを持っていて、だからこそ、人前で間違えたり、否定されたりすることを恐れます。入学後、そうした心持ちを変え、ため、私は、たとえ生徒が間違えた答えを言っても、そこに学びの価値があることを丁寧に説明しながら、生徒を肯定することを徹底します。次第に生徒たちは、自分の失敗が周囲を成長させていることに気づきます。そういった雰囲気のでき上があれば、自分の意見に対してクラスの仲間が『表面的に思える』と批判しても、それをアドバイスとして受け止め、次にどうすればよいかを前向きに考えることができるのです」

入学して半年。グループでの話し合いに、まだ積極的に参加できない生徒もいる。だが、そうした生徒に対しては、黒川先生は、「根拠が固まっているまま、形だけ語り合っても意味はない。自分の考えが固まるまで、焦らずに熟考すればよい」と言う。

「正解がはっきりしている古典に比べると、現代文では自分の読みの根拠が浅いと意見が言いにくいものです。失敗と成功を繰り返す仲間の姿を見て、議論に積極的でない生徒にも少しずつ自信をつけてもらいたいですし、机間巡視では、教科書などへの書き込みをチェックし、生徒の理解を支え、価値ある気づきを拾い上げていきたいです」



◎大阪市立此花総合高校と同属町高校が統合再編し、府内初の公立の併設型中高一貫校として開校。校訓は「進取・創造・敬愛」。2016年度は、「グローバル化改革をふまえた、中高一貫教育校におけるアクティブ・ラーニングを中心とした新しい授業法の研究」に取り組む。

設立

2008(平成20)年

形態

全日制／総合学科・演劇科・食物文化科／共学

生徒数

1学年約240人

2016年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、筑波大、京都大、大阪大、神戸大などに35人が合格。私立大は、東京理科大、法政大、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ332人が合格。

住所

〒554-0012
大阪府大阪市此花区西九条6-1-44

電話

06-6464-8881

Web Site

<http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=h543541>

大阪府・大阪市立

咲くやこの花中学校・高校

進路指導

高い目標を持たせる 個に応じた指導で、 希望進路の実現を図る

変革のステップ

背景

◎生徒の希望進路が多様で、生徒間の学力差が大きく、個に応じた進路指導が必要に。全体的に生徒の進路意識が高くないことも課題だった

実践

◎学校全体で進路指導方針を共有し、体系的・計画的な指導を開始。生徒の進路意識や学力の向上を図る授業や補習、個別指導にも力を注ぐ

成果

◎生徒の進路意識や学力は確実に向上し、前身校と比べて進学実績が大幅に伸びた

STEP 3

生徒の可能性を伸ばすため 新たな進路指導を構築する

大阪市立咲くやこの花中学校・高校は、2つの市立高校が統合再編して、2008年4月に開校した併設型中高一貫校だ。理数・ロボット工学・スポーツ・言語文化・造形芸術・映像表現の6つの系列から成る総合学科と、演劇科、食物文化科を擁しており、生徒の専門や興味・関心は幅広い。森知史校長は次のように語る。

「総合学科を中心とした中高一貫校の本校は、全国的にも珍しい形態です。専門や興味・関心の異なる生徒が学び合う環境は、本校の強みである反面、指導上の難しさもあります。特に、開校時からの課題が進路指導だ。現在、生徒の進路は難関国公立大学から就職まで多岐にわたり、学力の幅は、ベネッセのGTZ(*)で表すとS1からD3まで混在している。

「生徒はそれぞれ異なる進路を目指しており、一斉指導ではとても対応し切れません。個々の生徒を丁寧に見取り、それぞれに対応した指導が求められています」(森校長)さらに、生徒の進路意識があまり高くないことも課題だった。前身校の教師だった総合学科長の栗本要人先生は、次のように指摘する。

「前身校では、指定校推薦入試で受験できる学校から進学先を選ぶ生徒も多く見られました。その結果、進学先を中退する卒業生も

*学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」の15段階で評価される。

いました」

大学進学希望者が少なかったため、学校に進学指導の経験が蓄積されていない面もあった。

「前身校からそのまま異動してきた教師が多かったこともあり、進路指導も前身校と同じようにしていました。しかし、生徒の可能性を最大限に伸ばすためには、新



森 知史 もり・よしとし
大阪市立咲くやこの花中学校・高校校長
教職歴29年。同校に赴任して4年目。「常に謙虚に努力すること」



栗本 要人 くりもと・かなと
大阪市立咲くやこの花中学校・高校
教職歴20年。同校に赴任して9年目。首席。総合学科長。「確固たる信念とバランス感覚を持って指導にあたる」



田中 愛子 たなか・あいこ
大阪市立咲くやこの花中学校・高校
教職歴18年。同校に赴任して9年目。進路指導主事。「心の壁を乗り越えるため、『ともにふんばる』」



松下 弥生 まつした・やよい
大阪市立咲くやこの花中学校・高校
教職歴23年。同校に赴任して9年目。進路指導部。「学年や生徒の特性に合わせた指導を臨機応変に行う」



新崎 竜平 しんざき・りゅうへい
大阪市立咲くやこの花中学校・高校
教職歴3年。同校に赴任して4年目。進路指導部。「『教学』難しい」という思い込みをなくしたい」

な学校として進路指導を見直す必要がありました」(栗本先生)

センター試験の受験を勧め、 一般入試まで頑張る雰囲気醸成

10年度、同校は進路指導改革をスタートさせた。新たな進路指導方針に掲げたのは、大学進学希望者の一般入試での合格だ。以前は、進学先を早く決めたいといった理由から、指定校推薦入試を利用する生徒が多く、進路決定後は学習意欲が低下する傾向が見られた。そこで、希望進路の可能性を広げるために、「ガイダンス」や「面談」などで進路目標を高く設定するように促し、センター試験の受験を強く勧めた。

「私立大学にもセンター試験利用入試があるので、大学進学希望者であれば、センター試験は共通の目標となります。『みんなでセンター試験を受けよう』と呼びかけ、一般入試まで頑張る雰囲気づくりに努めました」(栗本先生)

当初は生徒だけでなく、保護者からも「指定校推薦入試で受験はできないのか」と問われたが、生徒・保護者の双方に、目標を高く持ち、挑戦する大切さを根気強く伝えて説得した。

そうした指導により、安易な指定校推薦入試の利用は減り、センター試験の受験者数は10年度の9人から、15年度には82人と大幅に増えた。

基礎・基本を重視する授業と 各種の「セミナー」で進路をサポート

生徒の希望進路の実現に向け、学力向上の取り組みにも力を入れた。まず、どの教科でも、基礎・基本の定着を授業で徹底することにした。

「本校から東京大学や京都大学を目指す生徒が出るようになると、当初は、その方針でよいのかと心配する教師もいました。新設校で進学実績がないため、その根拠を示すことはできませんでしたが、難関大学志望者でも、教科書の内容を十分に理解することは重要で、『学力の土台をつくるのが授業だ』と信じて、基礎・基本を大切にした授業を続けました」(栗本先生)

授業を補完して、さらなる学力向上につなげるのは、教科・レベル別に行う進学補習「セミナー」だ。「放課後セミナー」は、1・2年生は国語・数学・英語、3年生はさらに理科・地歴公民も加えた5教科で行う。主に演習と解説が中心の講義形式だ。土曜日に図書館を開放して実施する「土曜セミナー」は、自学自習を促すことが目的で、分からない問題は大学生アドバイザーの指導を受けられる。さらに、長期休業中の「集中セミナー」は、各学年で講座を開講。例えば、夏休みは約40講座を用意し、生徒は自由に選択して受講する。

1年間を通してセミナーが行われるため、そ

の様子に刺激を受けて、学習意欲を高める生徒もいる。進路指導部の松下弥生先生はこう語る。

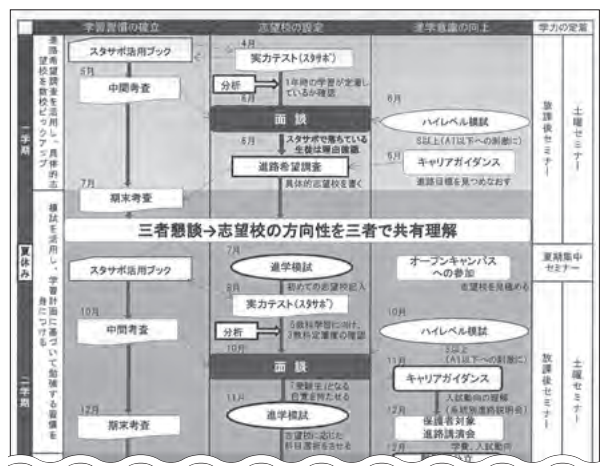
「ある教科のセミナーを希望する生徒が集まり、教科担当の先生に直接交渉して実施が決まったこともありました。また、セミナーとは別に、放課後に生徒が集まって教え合う姿も見られます。そのようにして、生徒と教師が一体となって学びに向かう『チーム咲くや』の雰囲気が生み出されています」

教師の考えや思いを集約した「進路指導マニュアル」を作成

3年間を通した体系的・計画的な進路指導にも着手した。まず、11年度に指導の目線合わせを目的として、独自の「進路指導マニュアル」を作成。これは、各学年の進路指導の目標を示し、それを実現するための指導チャート、時期ごとの模試受験の目的、大学レベル別の指導法、就職指導計画などを具体的に示した冊子だ。例えば、2年生の指導チャート(図1)では、「学習習慣の確立」「志望校の設定」「進学意識の向上」の観点から、各時期に求められる指導の詳細を記している。それらの内容は毎年見直ししており、16年度は約30ページとなった。

「進路指導マニュアル」の活用も後押しし、教師間の意識や指導法の共有が進み、指導のばらつきが見られなくなった。生徒は、学校の進

図1 2年生進学指導計画「基礎力」をつける 指導チャート



*学校資料をそのまま掲載

路指導に対して安心感や信頼感を抱くようになったという。また、新任教師や他校から異動してきた教師でも、すぐに同校の指導方針に沿った指導が可能となった。進路指導部の新崎竜平先生は、自身の着任の頃を振り返ってこう話す。

「私は進学担当ですが、生徒から就職について質問された時に『担当ではないから分からない』とは答えられません。『進路指導マニュアル』には、必要な情報が網羅されているので、初めての進路指導でも、生徒の質問に対して具体的に回答できました」

「進路指導マニュアル」の作成・活用は、校内のコミュニケーションを活性化させると、進路指導主事の田中愛子先生は説明する。

「各ページの作成は担当の先生方にそれぞれ依頼し、できた内容について、進路指導部内や関連する教師から意見を聞きます。その意見を基に作成担当の先生方と協議して、内容をよりよくしていきます。完成後は、学年との打ち合わせや様々な会議で活用することにより、進路指導部以外の先生方も巻き込んだ指導ができるようになりました」

進路指導の軸となる面談は、「進路指導マニュアル」に面談を行う適切な時期を学年ごとに示し、それぞれの時期に伝えたいことを整理した。「進路指導の最前線にいたるのは担任です。面談は、生徒に目標を確認させたり、時期に合った情報を提供したりと、生徒の進路意識を高めます。生徒から悩みを聞いて信頼関係を深めるなど、担任と生徒をつなぐ上でも大きな意味があると捉えています」(田中先生)

スタディーサポートを活用した「ガイダンス」で学力を引き上げる

生徒間の学力差の改善を目指し、ベネッセの「スタディーサポート」を活用して、GTZ別の「ガイダンス」も行っている。

「GTZのA2程度以下の生徒の多くは、目標の立て方や学習の仕方が分かっています。そこで、GTZを目安にして、よりきめ細かい指導を実施しています」(松下先生)

「ガイダンス」では、「今はGTZのこの位置にいるから、次はここを目指そう。そうすると、このような大学などがねらえる。こんな勉強が必要になる」など、具体的に話す。さらに指導が必要だと思われる生徒には、個々に話を聞いて状況を把握し、個別指導を行うこともある。

「教師と1対1で話すと、『頑張ろう』『しっかりやらなければ』という気持ちになりやすいようです。生徒の姿を見て、学力レベルに合わせた意欲の高め方を工夫することが重要なのだと改めて感じました」（松下先生）

また、主に成績下位層の生徒を対象とする補習「学び直しセミナー」も新たに開講した。数学と英語が中心で、教師が指名した生徒や希望者が受講。このセミナーでは、授業と同じ内容をもう一度教え、理解を深めさせている。

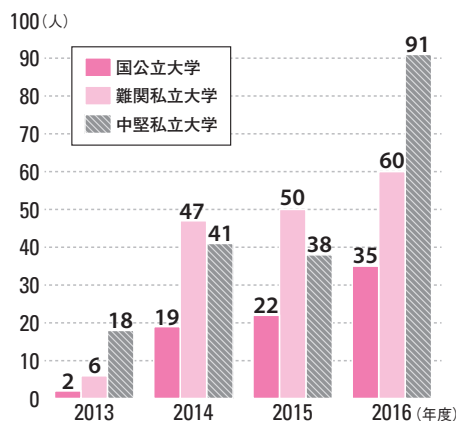
進学実績が大幅アップ、指導方針に確信を持つ

中学校から入学した1期生が臨んだ14年度入試は、6年間の教育の成果が試される機会とあって校内外から大きく注目された。結果は、前年度比で、国公立大学合格者数は2人から19人、難関私立大学合格者数は6人から47人と大幅に増えた（図2）。京都大学、大阪大学の合格者とともに2人出るという快挙も成し遂げた。

「教師の思いを感じ取り、自分たちの背中

を見て、後輩たちがついてきてくれるはずという思いで頑張った生徒も多かったようです。この結果を受け、指導の方向性は間違っ

図2 主要大学合格者数の推移



*学校資料を基に編集部で作成

若手教師が語る、指導変革への情熱

ほかの先生方を巻き込み、チームで教育をつくり上げたい

進路指導部 新崎竜平

進路指導部の一員として、生徒に高い目標を持たせるという方針の下、日々生徒に接しています。生徒の希望進路が1年後に変わっていることは珍しくありません。その時に後悔しないように、「選択肢の幅を狭めずに、今から精いっぱい頑張っておこう」と生徒によく話しています。

数学の教師として、積極的にセミナーを開講することも心がけています。担当している「学び直しセミナー」では、授業とはまた違うかわりを通して、生徒との信頼関係を深められるのがうれしいです。生徒の信頼を得られると、担当のセミナーや授業以外のことも気軽に質問してくれるようになります。

本校には1対1のコミュニケーションが比較的得意な人懐こい生徒が多いのですが、集団の中に入ると静かになってしまう傾向が見られます。進学や就職をしてからも活躍できるように、集団の中で積極的にコミュニケーションを取る力も身につけさせたいと思っています。

私が試行錯誤する姿を見てアドバイスをしてくれるなど、本校にはチームで教育をつくり上げたいという考えを持つ先生方が多くいます。「こんなことをしたい」と思い切って提案したところ、「いいね、やってみよう」と受け入れられて驚いたこともあります。そのような学校文化を引き継ぎ、ほかの先生方を巻き込む教師になることが、今の私の目標です。

ていないと手応えを感じました」（田中先生）
その後も進学実績は向上し、16年度入試の合格者数は、国公立大学35人、難関私立大学60人となった。地域からの評価も高まり、高校から入学した生徒の学力も徐々に向上している。

「生徒間の学力差は、他校に比べてまだ大きい状況です。多様な生徒の学力を確実に底上げし、毎日の授業を1つレベルアップさせることを目指して、アクティブ・ラーニングも充実させています。15年度は英語を中心に取り組み、16年度は全教科に拡大しました。『公立の総合学科の中高一貫校は、ここまでできる』という誇れる成果を目指し、ぶれない教育を継続していきます」（森校長）

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年10月号指導変革の軌跡「群馬県立前橋東高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

ビフォー
アフター

1年生秋

進路志望調査用紙

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、文理選択や志望大学・学部・学科選択など、希望進路を把握する「進路志望調査用紙」について検討する。

検討会メンバー



鳥取県立
鳥取中央育英高校
前田 幸男
まえた・ゆきお

教職歴18年。同校に赴任して12年目。進路指導部。数学科。「感謝の気持ちが行動の原動力」



東京都立
青山高校
鎌田 邦広
かまた・くにひろ

教職歴29年。同校に赴任して4年目。進路指導主任。数学科。「目いっぱいやりきった!」そんな最高の笑顔で卒業してもらいたい」



長野県
屋代高校・附属中学校
宇都宮 仁
うつのみや・じん

教職歴26年。同校に赴任して6年目。キャリア教育係主任。国語科。「生徒の『直観』と『情熱』を育てていきたい」

検討

生徒の志望を揺さぶることで
真の進路観を育みたい

前田 本校でも近年、多くの地方公立高校と同様に、入学者の学力

や進路意識が多様化しています。大学の学部・学科や学問に対する視野が狭かったり、志望する資格や職業と志望する進学先がミスマッチを起こしていたりします。1年生の進路意識をどう育てていくかが課題です。



鎌田 テレビなどの影響で、志望する職業を安易に決める生徒もい

ますが、そうした志望は、本当の志望とは言えません。そもそも、生徒の志望とは、教師が「確認するもの」



ではなく、「育てるもの」です。宇都宮 「志望を育てる」という考え方は、

高校でも同じです。生徒に「なぜ大学に行くのか」「本当に大学が最適な進路なのか」と問いかけ、あいまいな状態の志望に揺さぶりをかけることが大切です。大学訪問や職場体験でやりたいことを突き詰め、大学、短大、専門学校はそれぞれ何が違うのかも調べ、じっくりと進路を考えてほしいです。生徒は保護者の価値観に左右されやすいですから、保護者に対しても保護者会や学年通信を

通した揺さぶりが必要です。

前田 生徒にも保護者にも揺さぶりは必要ですが、揺さぶりのタイミングや加減が難しいのも事実です。「自分の志望を変えさせようとしている」と早合点し、教師に背を向けてしまうこともあるからです。

鎌田 生徒が自分で考えるきっかけづくりが重要ですね。その1つが、志望している進路だけでなく、志望理由などを書かせることだと思っています。本校でも、社会問題に対する考えや、幼少期からの興味・関心は、どのようなことがきっかけで持ったのかなど、どんなことでも構わないので、他者とのつながりや社会の中の自分を意識して志望理由を書かせています。ただ「志望理由を書きなさい」と言うだけでは、生徒

鳥取県立鳥取中央育英高校 前田幸男先生 1年生秋「進路志望調査用紙」

入学時点では、資格が取れる医療や教育などの分野に興味を持っている生徒が多い同校。「資格を取るのなら専門学校」と思い込んでしまっている生徒もいるため、大学進学などほかの道もあり、それぞれにメリットがあるといったことに気づかせる、きっかけづくりを重視した調査。

ねらいと機能

1年生が「大学進学」を具体的に考えるきっかけとしたい

鳥取県立鳥取中央育英高校では、1年生の6月、そして9月～10月に、右の用紙を用いて進路志望調査を実施している。同校は、入学時点で半数あまりの生徒が進学先の第1志望として専門学校を挙げる。この時期の進路志望調査では、文理選択の状況を把握するとともに、1学期中に行う適性検査や大学訪問などと併せて、卒業後の進路の選択肢として大学への興味・関心を高めるきっかけとなることが期待されている。

鳥取県立鳥取中央育英高等学校 第1学年

第2回 進路志望調査

1年 組 番 氏名

(1) 2年生の文理選択：卒業年度の希望類型を□で囲むこと

文・理・体・育

(2) 卒業後の希望進路：卒業1志望の番号を□で囲むこと

1 国公立大学 2 私立大学 3 短期大学 4 医療看護専門学校
5 各種専門学校 6 公務員 7 民間就職

(3) 希望する職業

(4) 興味のある学部・学科

志望順位	学 部	学 科	文・理	具体的な学校名
第1志望				
第2志望				
第3志望				

生徒の中には、入学時の「資格志向」「専門学校志向」にこだわるあまり、国公立大学と私立大学の違いや、どのような学部・学科があるのかが分かっていないことがある。さらに、学べる学問やそこから広がる職業、取得可能な資格に関する知識が乏しいケースもある。

課題と解決策

3

生徒が書いたこと、書けなかったことを材料に面談を行う。

2

志望している進路だけでなく、どのような理由、きっかけでその志望に至ったのかを書かせる。

1

生徒の志望を安易に受け入れるのではなく、「なぜ？」「本当に？」と問いかけ、志望を揺さぶる。

はその場しのぎの言葉を連ねてくるかもしれないから、書く前に、「君たちが進路を深く考えるきっかけになる」「たとえ書けなくても、書けないことを知ることが成長になる」と取り組みの意図を説明しています。

宇都宮 生徒にとって、少し考えられど気軽に書くことも許される、そんなシートがよいですね。生徒が書いたこと、書けなかったことはすべて面談の話題につながります。書くことで自分を揺さぶり、面談で教師から揺さぶられるのが理想です。

前田 多様な揺さぶりによって、生徒が「自分は本当にこの進路でいいのだろうか」と自ら問い直すことが、この時期の進路指導の目標になるというわけですね。

学校プロフィール

鳥取県立鳥取中央育英高校

◎全日制／普通科 普通コース、体育コース
／共学／1学年約160人

◎2016年度進路実績（現浪計）／国公立大は、京都教育大、徳島大、高知大などに4人が合格。私立大は、順天堂大、鳥取看護大などに延べ35人が合格。短大進学19人、専門学校進学40人、就職20人、公務員11人。

東京都立青山高校

◎全日制／普通科／共学／1学年約280人
◎2016年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、東京大、東京工業大、一橋大、京大などに103人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ611人が合格。

長野県屋代高校・附属中学校

◎全日制／普通科・理数科／共学／1学年約270人

◎2016年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、東北大、京大、大阪大などに129人が合格。私立大は、中央大、早稲田大、同志社大などに延べ339人が合格。

検討会で明らかになった課題を踏まえ「進路志望調査用紙」を改良！次ページで紹介します。

アフター

進路志望調査

1年 組 番 氏名

1. 高校卒業後の夢や目標、計画は何ですか。なりたい職業や学びたい学問、解決したい社会問題、かわり続けたいテーマ、何でも構いませんので、記入してください。

※夢や目標、計画が漠然としている人は、「お金持ち」「アニメ」「海外」などキーワードでもOK。思いついたものを書こう。

2. 上記のような夢や目標、計画を持つようになったきっかけ、出来事を教えてください。

3. そのきっかけ、出来事を通して、「自分自身について分かったこと・気がついたこと」や「自分の中に生まれた変化」を教えてください。

4. 上記1の夢や目標、計画は、「社会（日本・世界）のためにできること」「自分以外の人の幸せ」にどのようにつながっていると考えられますか。

5. 自分の夢や目標、計画を実現するための進路として、第1志望の番号を○で囲んでください。

- 1 国公立大学 2 私立大学 3 短期大学 4 医療看護専門学校
5 各種専門学校 6 公務員 7 民間就職

6. 興味のある学部・学科

志望順位	学 部	学 科	文・理	具体的な学校名（あれば）
第1志望				
第2志望				
第3志望				

進路面談後に記入◎ 面談での先生のアドバイスを踏まえて、実現するための進路についてさらに調べてみよう。同じ希望進路の生徒と一緒に調べてもよい。

進路意識の醸成が不十分で、進学先に関する知識も乏しい生徒には、漠然とでもよいので将来かわり続けたいテーマや気になることなど、できるだけ率直に書いてもらえそうな質問項目とした。

1～4の質問項目で書いた内容を基に、自分の夢や目標、計画を実現するための進路は何かを考えさせる。

1年生の秋の時点での志望は、あくまでも仮のもの。だからこそ、教師が面談で生徒の志望を揺さぶることが重要という観点から、面談の内容を踏まえた進路学習の成果や気づきを書き込む欄を新たに設けた。

改訂後のねらいと機能

現状の調査ではなく、対話のヒントを拾うツールに

改訂版では、現時点での希望進路を聞く前に、「高校卒業後の夢や目標」「そのきっかけとなった出来事」「出来事を通して自分について気づいたこと」など、言わば希望進路に至る背景を入念に尋ねる質問項目とした。また、理路整然とした言葉だけでなく、キーワードレベルでの回答も認めるようにしたのは、進路志望調査用紙を基にした進路面談で、生徒の志望を掘り下げていくヒントを少しでも多く拾い上げようという意図からだ。まさに「調査」のための記入用紙から、「教師と生徒の対話のツール」としての用紙へとねらいが大きく変化した。

なお、今回の検討会では、「生徒の進路意識を高めるには、教師の100のアドバイス以上に、上級生や卒業生の言葉が有効」（宇都宮先生）という観点から、「卒業生を学校に招き、進路選択の体験を語ってもらうこと」で、『僕らでも、国公立大学に行けるんだ』『自分も頑張ろう』と、生徒の意識改革が図れた（鎌田先生）といった事例も紹介された。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け→生徒指導・進路指導ツール集」でご覧ください。

活用

興味・関心があるキーワードから、
対話の中で進路観を醸成する

前田 改訂版では、希望進路を書かせる前に、その背景となる興味・

関心や社会問題など、キーワードレベルでもよいので挙げさせるようにしています。現実として、1年生の段階で「将来何になりたいか」が明確であっても、その職業にそのまま就く生徒は多くはありません。私たちが「何になりたいか」と問うのは、職業名を聞きたいからではなく、希望進路へのこだわりにつながるキーワードが知りたいからだと思ひ至りました。



宇都宮 キーワードでもよいとすることで、いろいろな考えが出し

やすくなり、面談でも「だったらこんなことも……」などと話を広げやすくなりますね。「解決したい社会問題」と言うとき少し重い感じもするので、用紙を配った時に「自分の好きなことが自分以外の人にとって役立つのかを考えてみよう」などと少し



鎌田 「志望（キーワード）→「出来事」→「出来事から分かったこと」と、段階を踏んで書かせることで、自分について深く掘り下げて考えていくことができ、真の志望の糸口が見えてくるのではないのでしょうか。教師との面談の材料としてはもちろん、書いたものをほかの生徒と共有し合えれば、きつとよい刺激になるでしょうし、似たような進路を志望する生徒をグループにして、どのような進学先や学問があるのかなどを協働しながら調べさせてもよいでしょう。一人ひとりが書いたものはあくまでも出発点で、それを基に面談やグ

解説してあげるとよいでしょう。実際、社会人としての活動は、ほかの人とのかかわりの中で実現できることばかりなのですから。



活用の流れ

- 1 進路志望調査用紙を書かせる前に、教師から書く目的・意図を伝える。

- 2 記入した用紙を参考に、進路面談を行い、真の志望かどうかを生徒自身に見極めさせる。

- 3 真の志望が固まった生徒には、進路先について詳しく調べさせ、さらに深く考えさせる。

ループワークを行い、探究させることで、進路志望調査が完成するという考え方です。

宇都宮 生徒から保護者に、「学生時代に好きだったことは今の自分とどうつながっているのか」と質問したり、「自分の志望に対して保護者はどう考えているのか」「自分にはどんな進路を勧めたいのか」を聞いたりしてもよいでしょう。生徒と保護者の間での価値観のすり合わせは、入試直前ではなく、少しでも早い時期から行っておきたいものです。

前田 進路志望調査用紙が、保護者にとっては子どもの進路観への理解を深めるきっかけになればよいです

ね。そして、生徒にとっては保護者と向き合い、対話し、説得するための第一歩にしてみたいです。

鎌田 実際には、高校時代を目指した職業に就く人は多くはないかもしれませんが、それでも「社会に貢献できる」という納得感があるから、ほかの職業に就いても続けていけるのではないのでしょうか。「社会で生きるための自分の軸とは何か」を生徒が自らに問い続けられるような指導をしたいです。

前田 社会とのつながりの中で、生徒が自分の可能性を引き出せるような指導をこれからも追求していきたいです。

英語力と人間性を 授業内外で育てるカリキュラムで グローバル・リーダーを育成する

（ 北海道大学 ● 新渡戸カレッジ ）

北海道大学は、グローバル・リーダーの育成を掲げて、2013年度、学部横断的な特別教育プログラム「新渡戸カレッジ」をスタートさせた。各学部での専門教育にプラスして、グローバル社会で活躍するために必要なスキルとマインドを身につけるプログラムだ。その特色は、3か月以上の海外留学の奨励や、外国人留学生との交流などで、英語力育成を支援していること、そして、社会で活躍している同窓生がフェローとなり、グループワークや1対1の面談などで自身の経験や見識を伝え、学生のキャリア形成を支えていることだ。

長期留学に結びつけるための短期留学を奨励

「グローバル・リーダーの育成」は、今や多くの大学が掲げる目標だ。科学技術が発展し、ヒト・モノ・カネ、そして情報が国境を越えて自由に行き来する社会となり、国内にいてもグローバルな視野が欠かせなくなった。そうした時代における日本社会を牽引する人材を育むため、文部科学省は、2012年度に「グローバル人材育成推進事業（現・経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）」をスタートさせ、各大学は様々な教育活動を展開している。

そのプログラムの1つに、北海道大学が2013年度に始めた全学共通の特別教育プログラム「新渡戸カレッジ」がある。これは、同大学の「4つの基本理念（フロンティア精神、国際性の涵養、全人教育、実学の重視）」に基づいて、高い精神性と異文化理解、コミュニケーション能力を身につけたグローバル人材の育成」を教育目標に掲げて、長期留学または複数の短期留学を必修とし、チームワーク力やリーダーシップ力、問題解決



北海道大学大学院文学研究科准教授
La Fay Michelle
ラファイ・ミシェル
文学研究科国際交流室長。総長補佐。

力などを身につけていくプログラムだ。文学研究科国際交流室長で総長補佐も務めるLa Fay Michelle 准教授は、次のように説明する。

「グローバル・リーダーを目指す上で、実際に海外に長期滞在し、多様な背景を持つ人たちと一緒に学び、生活する経験は重要な意味を持ちます。しかし、本学には長期留学に行く学生がまだまだ少なく、その人数を増やすことが大きな課題です。学生にとって長期留学はハードルが高く、また費用面の不安もありますが、一度でも留学を経験すると、海外で学ぶ重要性に気づきます。そこで、まずは短期留学を支援するプログラムを充実させました」

同カレッジは、学部教育にプラスして任意で履修するものだ。入校対象は1・2年生で、希望者はプレイスメントテストのTOEFL・ITPを

図1 「新渡戸カレッジ」のカリキュラム

ねらい	科目名等	授業の概要	単位数
グローバルコミュニケーションツールとしての英語力の育成	留学支援英語	英語を母語とする講師による、1クラス20人以下の少人数クラスで、実践的な英語を学ぶ。英語によるコミュニケーション能力の向上、留学時に必要なアカデミックスキルの修得を目指し、レベル別のクラスで展開。	4単位以上
	国際交流科目	原則として英語で行い、外国人留学生と日本人学生がともに履修できる科目。学際的・先端的なテーマで、入門レベルから専門レベルまで開講。	4単位以上
	英語による学部専門科目	各学部において開講される英語で行う専門科目。	
	日本文化・社会に関する理解増進科目	海外留学生を対象とした、複数の日本文化に関する講義を英語で開講。	
	海外留学	協定校等への原則1セメスター以上の留学。または、複数の短期留学の組み合わせ。	1単位以上
チームワーク力、リーダーシップ力の育成	フィールド型演習	20人程度の少人数クラスによる体験型演習。練習船「おしよ丸」の乗船訓練、農場での体験学習、演習林での環境学習など。	2単位以上
多文化状況の中での問題解決力の育成	多文化交流科目	原則として日本語で行い、外国人留学生と日本人学生がともに学ぶ問題解決型授業。	2単位以上
世界の中での日本人としての自覚の涵養とキャリア形成	新渡戸学	学内外の著名な教員等による講義、新渡戸カレッジフェロー等による講演や演習。	2単位以上 (新渡戸学1単位必修)
	ボランティア	NPO団体などで、ボランティア活動を行う。	
	インターンシップ	企業などで1～2週間のインターンシップを行う。派遣先は、国内だけでなく海外の企業もある。	

* 同大学の資料を基に編集部で作成

受けて、スコアが500点以上であれば合格となる。16年度は1・2年生合わせて474人が受験し、264人が合格した。

同カレッジのカリキュラム(図1)のうち、「新渡戸学」「ボランティア」はカレッジ独自の科目で、ほかの科目は、全学教育科目などとして開講されている科目と、新規に開講した「留学支援英語」「多文化交流科目」だ。

それらの科目を「新渡戸カレッジ」の教育課程として体系化し、所属学部のGPA(*1)を含めた修了要件を設定して、それらを満たした学生には称号を付与する(図2)。グローバル・リーダーの候補生として、語学力や留学経験だけでなく、学部教育全体の成績も含めて質の高い学生であることを担保しているのだ。

図2 「新渡戸カレッジ」の修了要件

①～④の要件を満たした学生を修了生とし、英語・GPAの成績に応じて、3段階で称号を付与する。

- ①指定科目を15単位以上修得
- ②所属する学部での卒業認定
- ③英語能力の水準がTOEFL-iBT 80点以上
- ④GPAが所属学部において上位50%以内

- **Summa cum Laude**
TOEFL-iBT 100点以上、GPA 上位15%以内
- **Magna cum Laude**
TOEFL-iBT 90点以上、GPA 上位30%以内
- **Cum Laude**
TOEFL-iBT 80点以上、GPA 上位50%以内

* 同大学の資料を基に編集部で作成

留学や外国人留学生との交流で英語力を高める

同カレッジの特徴の1つは、グローバルなコミュニケーションツールとしての英語力の育成を、様々な面から図っていることだ。

まず、海外留学は、交換留学(交流協定大学への1セメスターか1年未満の留学)を推奨している。ただ、主に3年次後期から行く交換留学は学生にはハードルが高いため、複数の短期留学の組み合わせでも単位を取れるようにした。獣医学部3年の山下渚さんは、1年次の春休みに5

週間、オーストラリアの協定校での語学研修プログラムと、2年次の夏休みに「ファースト・ステップ・プログラム(FSP)」(2週間、イギリス、フィンランド)に参加した。「獣医学部には必修科目が多いため、長期留学は難しいと考えて短期留学にし、さらに長期休業中にある学部必修の実習期間を避けて、2つのプログラムを選びました。理系学部の学生でも、事前に計画を立てれば1か月程度の留学は可能です」

語学研修プログラムは語学研修と文化体験が中心だが、FSPは現地大学の授業体験や学生との交流、国際機関や企業の見学など、長期留学への意欲涵養を重視した内容だ。

「現地の学生とのディスカッションや、現地で働く日本人の



北海道大学
獣医学部共同獣医学課程3年
山下 渚 やました・なぎさ
新渡戸カレッジ2期生。大阪府・私立桃山学院高校卒業。

* 1 Grade Point Average の略。履修科目の評点に単位数を加味して算出する成績評価値。個々の学生の到達水準を測る目安に用いることができる。

職場訪問など、海外で学び、働くことをイメージできるようなプログラムとしています」(La Fay 准教授)

費用面を支える奨学金も充実させた。留学期間を問わず、大学独自の海外留学奨学金、日本学生支援機構の留学生交流支援制度などの利用が可能であり、さらに、カレッジ独自に、ほかの奨学金との併用も可能な「北海道大学フロンティア基金新渡戸カレッジ(海外留学奨学金)」を創設。山下さんは、この奨学金と日本学生支援機構の奨学金を利用し、大いに助かったという。

英語で学ぶ科目で 生きた英語に触れる

「留学支援英語」で英語を学ぶ授業を充実させるとともに、英語で学ぶ「国際交流科目」も多彩な科目をそろえる。「国際交流科目」は、日本人学生と外国人留学生がともに履修でき、内容は倫理学、社会学、数学、生物学など、担当教員の専門分野となる。外国人教員だけでなく、日本人教員も英語で開講しており、山下さんは農学部の日本文教員の科目を履修した。「受講生は中国人、オーストラリア

人、韓国人で、皆、日本語があまり上手ではなく、会話は英語のみでした。先生も含めてネイティブ・スピーカーではない人が多く、ネイティブ以外の英語を聞く練習にもなりました」

外国人留学生とともに授業を受ける科目として、「日本文化・社会に関する理解増進科目」や「多文化交流科目」もカリキュラムに組み込んでおり、彼らとの交流で英語力だけでなく、異文化理解も深まっていく。

『多文化交流科目』で留学生と日本語で議論をして気づいたのは、言葉が違うから通じないのではなく、前提となる価値観が違うから話がかみ合わないのだということです。コミュニケーションの難しさを改めて感じました」(山下さん)

学部を超えた交流で 意欲と人間性を涵養

グローバル・リーダーに求められる人間性も、授業内外で育成する。

授業では、チームワーク力やリーダーシップ力などを身につけていく場として、「フィールド型演習」を開講している。これは、大学の施設を利用した乗船訓練や農場体験などの



写真1 「フィールド型演習」の農場体験は、受講生が協力しながら牛や馬の世話をし、チームで協力する大切な、適切な役割分担の手法などを学び、たくましさも身につけていく。

実習科目で、受講生は協働で体験型演習に取り組む(写真1)。

授業外では、カレッジ生同士の交流の場を多数設けて、刺激を与え、視野を広げるとともに、コミュニケーション力を鍛えていく。例えば、1・2年生では20人程度のグループを設定し、定期的にミーティングを行い、自身の学びの計画を発表し合ったり、討論をしたりする。また、全学年が参加する年2回の合宿では、学年や学部を超えたチームでディスカッションや課題解決型学習に取り組む。「学生同士の多様な交流が生まれるように、グループワークの進め方やテーマは毎回工夫しています。講演



写真2 「グループ・ミーティング」はフェローが学生の将来への意識を涵養する場だ。例えば、卒業後は就職か研究かのどちらかしか選べないと思いつている学生に、研究職としての就職があると伝え、視野を広げさせる。

会後も単なる質疑応答ではなく、隣の席の人とディスカッションをさせることもあります」(La Fay 准教授)

フェローの豊富な経験と知見が 学生の意識を揺さぶる

学生のキャリア支援では、各界で活躍する同窓生によるフェロー制度が重要な役割を果たす(図3)。1・2年生では、グループでの交流が中心で、フェローが自身の社会経験や人生経験を伝える(写真2)。3・4年生では、希望制によるフェローとの個別面談によって、学生の自己分析や将来へのキャリアを考えることにつなげ、行動に促していく。

図3 フェロー制度における活動

活動名	対象学年	概要
グループ・ミーティング	1・2年生	1年生は前期2回、2年生は年間を通して、少人数グループ(20人程度)で活動。活動の内容はフェローによって異なる。
学内合宿	全学年	5月と10月、全カレッジ生を対象に、学内で実施。1回目は、カレッジの仕組みや精神を理解すること、グループ内、担当フェローとの親睦を深めることが目的。2回目は、グループでのディスカッションやディベートなどの活動を通して、視野を広げ、コミュニケーションスキルを磨く場としている。
新渡戸カレッジ講演会シリーズ	全学年 (カレッジ生以外も聴講可)	教員やフェローによる講演会(全12回)。講演の後にグループワークを行うこともある。8回以上の受講・レポート提出で1単位取得。英語による講演の場合は英語でレポートを書く。
フェローゼミ	1年生	現代社会の諸問題を観察などの実体験を通して発見し、課題解決に向けたグループワークを行う。それらの活動を通して、チームワークの重要な要素を理解し、またそれらを活用する力を身につける。
対話プログラム	3・4年生	希望者がフェローと1対1の対話を行う。原則、学生の希望を優先してフェローを決定(事前予約制)。フェローの国際感覚や経験に接して、自身の考える力、行動力、チームワーク力などを培うことをねらいとしている。
新渡戸カレッジキャリアセミナー	3・4年生	年3回実施。1回目はフェローやグループ内の話し合いで気づきを得ること、2回目は設定目標の実行状況を自己分析した上で、フェローと個別面談をし、目標の実現に向けて取り組みのレベルを向上させることがねらい。3回目はその後のフォローとして、フェローとのショート面談を実施する。

* 同大学の資料を基に編集部で作成

フェローは現在31人。国際的な企業の管理職、国家公務員、NPO法人の代表など、各界でリーダーとして活躍する同窓生がそろそろ。年代も30代・80代と幅広く、多彩な顔ぶれだ。

「フェローに相談をすると、単なるアドバイスではなく、自分で答えを出すために考えた方がよいことを教えてくれます。『海外で働く』など、自分では思いもつかなかった選択肢も示してくれて、考えの幅が広がった

たと思います」(山下さん)

活動前にはフェローとカレッジ側が打ち合わせをし、カレッジの趣旨や活動の目的を共有する。

「道外に住むフェローもいますが、活動への参加率は高く、熱心に、しかも無償で協力していただいています。そのことは学生にも説明しており、フェローのボランティア精神にも学んでほしいと思っています」(La Fay 准教授)

視野が広がり、自分の可能性を探る学生たち

カレッジ開校から4年目となり、入校者のレベルは徐々に上がっている。実施初年度は入校基準をクリアする学生は少なかったが、今では入校定員を上回る人数が合格する。

「本カレッジに意欲的で、自分ですっかり準備をしてきていることが、入校希望者の英語力の高さから感じ取れます」(La Fay 准教授)

海外留学生数も、13年度の510人から、14年度は536人と増加し、うち110人が新渡戸カレッジ生だった。長期留学は難しいと考えていた山下さんも、今では学部留学プログラムを利用して海外の研究の場に飛び込み、いろいろな経験を積みみたいと意欲的だ。

「海外でなければ学べない、研究できないこともあります。例えば、動物福祉学はヨーロッパが先進的で研究が盛んですし、日本には生息していない寄生虫やまだ日本に入っていない感染症をアフリカや東南アジアで標本調査し、研究している人もいます。先輩たちの話を聞くだけ

でなく、現地に行って自分もやってみたいと思うようになりました」

フェローの声からも学生の成長が感じ取れると、La Fay 准教授は言う。

「1年も経つと、グループワークで積極的に発言するようになり、大勢の前でのプレゼンテーションも堂々とするようになると、多くのフェローから聞いています。講演会のレポートを見ても、自分の考えをしっかりと述べていますし、英語のレポートでもびつしり書いてきます」

カレッジの活動を通して、学生は多様な刺激を受け、自身で考え、学びに向かい、将来を形づくっている。

「大学の学びは誰からも強制されません。自分で行動することが大事です。教科書に書いてあるから正解なのではなく、自分で納得するまで考える大切さを、北大に入り、カレッジで学んで感じています」(山下さん)

「今は完璧ではなくても、成長できるチャンスはいくらでもあります。恐れずに何でもチャレンジしてほしいと思います」(La Fay 准教授)

多面的・総合的な評価による入試とインターネット出願の新たな試み

高大接続の改善を目指し、四国国立5大学が「活動報告書」を活用した入試を実施

徳島大学、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学、高知大学は、多面的・総合的な評価による入学者選抜を行うため、志願者が経験した諸活動を記載する「活動報告書」を、選抜資料として、まずは一部のAO入試で取り入れることにした。さらに、同5大学は共同のサイトを開設し、2016年度的一般入試からインターネット出願を開始。高校生が活動を自由に記録できるサイトも立ち上げ、進学準備の後押しをしている。

抜本的な入試改革を目指し、共同のアドミッションセンターを設置

四国にある5つの国立大学（徳島大学、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学、高知大学。以下、5大学）は、2013年、「四国5大学連携による知のプラットフォーム形成事業」連携協定を締結した。これは、5大学がそれぞれ持つ資源を効果的・効率的に活用するという観点から、教育活動や入試、産学官連携などにおいて、大学の枠を超えて共同実施し、それらの相乗効果によって活動の質・量ともに充実を図ることがねらいだ。

この事業の一環として、13年、愛

媛大学をメインオフィスとして、「四国地区国立大学連合アドミッションセンター」（図1）を設置し、志願者を多面的・総合的に評価するための選抜方法の開発・実施を進めている。同センター長を務める愛媛大学の井上敏憲教授は、その意義をこう語る。

「国立大学でも推薦入試やAO入試の実施が広がり、志望理由書の提出、面接や小論文が課されるようになりました。それによって、ペーパーテストのみの一発勝負で合否が決まる入試だけではなくりましたが、大学が志願者の資質や適性をきちんと評価しているかというと、必ずしも

そうではありません。そのため、多

くの高校では、主体性・協働性などを育む探究学習などをしていても、一定の時期からは受験対策のみとなり、生徒の成長を中断させてしまっています。その原因は、大学の入試制度にもあると捉え、本センターでは抜本的な入試改革を目指しています」

「活動報告書」で日常的な学びを評価

大学が多面的・総合的な評価を行うためには、志願者に関する情報を増やす必要がある。その資料として同センターは、志願者が意欲的に取

図1 「四国地区国立大学連合アドミッションセンター」概要

参加大学

徳島大学、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学、高知大学

目的

四国地区にある5つの国立大学が共同でアドミッションセンターを設置して、志願者の資質や適性を総合的に評価する新たな入試を実施。日本の未来を担う意欲ある地域のリーダーの育成に資する。

活動内容

- ・連合AO入試などの企画・実施
- ・広報活動の企画・運営
- ・入学予定者のフォローアップ
- ・高大接続、大学入試に関する調査・研究

り組んできた諸活動について報告してもらおう「活動報告書」に着目した。学力検査以外の選抜資料には、志望理由書や学修計画書が挙げられるが、それらは入学後の活動についてアピールする内容であり、あくまでも将来の展望となる。また、面接や小論文の場合では、生徒は多くの練習を積んで臨んでおり、自分をよく見せようとする側面が強くなりやすい。その点、「活動報告書」では、本人の実績に基づいた意欲・努力の成果を知ることができ、資質・能力の評価に適した資料と言えると考えた。「私たちが評価したいのは、どのような考えの下にどう行動し、何を学



四国地区国立大学連合アドミッションセンター長、愛媛大学 教授

井上敏憲 いのうえ・としのり

愛媛県の公立高校教師を務めた後、愛媛大学に着任。大学教育総合センター及び教育・学生支援機構助教授を経て現職。

図2 5大学が設定した「活動報告書」の内容

● 意欲的に取り組んだ活動 (3件まで)

①活動名、②活動期間、③活動の説明(300字)、④参考資料

● 課題研究 (1件)

①テーマ、②そのテーマを選んだ理由、③概要・成果の説明(300字)、④個人研究・グループ研究の区別、⑤研究期間、⑥補足欄(300字)、⑦問い合わせ先(指導教員名)、⑧参考資料

● 資格・検定等(英語に関するもの3件、その他10件まで)

①名称、②級、スコア、賞等、③取得等の年月

* 四国地区国立大学連合アドミッションセンター提供資料を基に編集部で作成。件数や字数等は入試の種類によって異なる場合がある

び、何を得たのかという活動の過程です。優れた成績を残していないから「活動報告書」が書けないということはありません。成績のよしあしはともかく、熱意を持って取り組んできたことであれば、どんな活動でも書いてほしいと思います。もちろん、学校外の活動も評価の対象になります」(井上教授)

同センターでは、「活動報告書」を3種類(図2)に設定。5大学それぞれが、どれを選抜資料として課すかを決める。

『活動報告書』は文章力を評価するものではありませんから、事実を

的確に書ける量として300字にしました。また、多面的な評価の観点から、記入・入力できる活動の上限は3件としましたが、件数が少ないという理由だけで不利な評価はしません」(井上教授)

16年度は、愛媛大学が、社会共創学部、及びスーパーサイエンス特別コースのAO入試で「活動報告書」を利用。合計237人が出願した(「活動報告書」は紙での提出)。

「面接では、志望理由書での入学後の展望、『活動報告書』での高校での活動と、複数の情報を基に質問できたことで、志願者をより多面的に評価できました」(井上教授)

17年度入試では、愛媛大学に加え、香川大学医学部看護学科、高知大学医学部医学科がAO入試で「活動報告書」を利用する。

今後の入試改革を念頭に インターネット出願を導入

同センターでは、5大学共同のサイトを開設し、インターネット出願も進めている。16年度に5大学が一齐に一般入試でインターネット出願

を開始し、17年度入試では、AO・推薦入試にも拡大する。今後、紙出願を廃止し、インターネット出願に一本化する予定だ。インターネット出願では、同一の志願者が5大学の複数の入試に出願する場合、連絡先などの基本情報の入力が一度で済む。また、17年度入試からは一部の入試で「活動報告書」もオンライン入力が可能となる。今後、一般入試でも「活動報告書」などの提出書類が増えた場合、データで出願する方が整理・保存・管理しやすいというメリットが、志願者・大学側双方にある。

また、インターネット出願や「活動報告書」の作成を後押しするため、同センターは進学支援サイト「今口グ」(P.49図3)を開設した。これは、自身の活動や考えを記録できるサイトで、誰でも無料で利用できる。

「出願時に3年間の活動を振り返るのではなく、1年生の時から活動の都度、その内容や自身の考えを記録することで、『活動報告書』の作成に役立ててほしいという思いから、このサイトを立ち上げました。高校の進路指導でも活用していただければと思います」(井上教授)

高校と大学の対談

高校教育と大学教育を 真につながるための改革を目指す

**教科学力を評価した上で、
意欲・適性の評価をプラス**

——高大接続改革では高校教育改革も柱の1つです。高市校長の高校ではどんな取り組みをされていますか。

高市 本校の生徒は、真面目で努力家で協調性もあります。授業でのグループ学習は活発で、行事や部活動にも一生懸命取り組みます。ただ、何事も素直に受け止める傾向があり、例えば、自ら挙手をして発言することとは少ないように感じます。そうした気質を変えていくと、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業改善を進め、さらに、授業、行事、部活動などの教育活動を点や線から面の活動にしていくために、カリキュラム・マネジメントの観点で見直し始めました。ただ、心配なのは、今

後の大学入試改革の動きです。本校では毎年、国公立大学に120人前

後が進学します。そのため、今は、従来型の受験指導をしながら、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた

授業でどこまで教科学力を伸ばせるのかを試行錯誤している状態です。

多面的・総合的な評価による入試は、今はAO入試が中心ですが、今後どう広まっていくのが気になります。

井上 高大接続システム改革会議の最終報告などでは、一般入試でも多面的・総合的な評価を行うこととしています。従来の一般入試ではほとんど行われていない評価ですから、そこに注目が集まっています。ただ、大学は高等教育機関ですから、入学者に相応の教科学力を求めることは必須です。これまで通り、教科学力をしっかり評価した上で、意欲や適性などの評価はそれにプラスするとい

うイメージです。その影響力をどう捉えるのかは人それぞれだと思います。例えば、一般入試で意欲・適性に関する評価の割合が10%だとすると、10%くらいなら合否に影響はないという考え方もあるでしょうし、現状では加味されていない要素が評価の対象となるのだから10%でも影響は大きいという捉え方もあるでしょう。

高校では、以前から教科学力以外にも、行事や部活動などで人間性を育む教育も重視していますし、今や大学も、知識・技能だけでなく、主体性や協働性なども育もうとしています。その間をつなぐ大学入試だけが取り残されているのです。高大の教育の連続性を確保するために、大学入試も意欲や適性などを加味するものになって然るべきだと考えます。

高市 本校では「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を中心に、海外の姉妹校との交流やキャリア教育を充実させ、様々な人との出会いや体験を通して、生徒が自らの個性を見極め、その力を伸ばすことを目指しています。大学には生徒の力が自学で伸びるのかどうかを評価してもらい、大学でさらに活躍の場が広が

広島県立広島井口高校 校長

高市和子 たかいち・かずこ

同校に赴任して6年目。同校では「総合的な学習の時間」を中核として全教科で能動的協働的な学びを推進中。



るという高大接続ができればよいと考えています。

井上 これまでは、そうした生徒がいても、大学入試のために3年生の夏休みから受験対策のみとなっていました。伸びている生徒は高校3年間、伸び続けてほしいですし、そうしたことを評価して大学に入学させたいと考えて、四国国立5大学では入試改革を進めようとしています。

高市 高大接続システム改革会議の最終報告などを読むと、大学入試が大転換するのではないかと思います。だが、井上先生のお話を伺うと、大学入試に多面的・総合的な評価を取り入れることは自然な流れで、これまで教科学力に偏っていた評価を、

高校3年間の諸活動を総合的に評価する形にするのだと分かりました。

3年間の活動を評価に結びつけるための記録を

——多面的・総合的な評価による入試の実現にあたり、四国国立5大学では、選抜資料として「活動報告書」を取り入れられました。

井上 愛媛大学のAO入試の中には、「活動報告書」を面接の資料に用いて面接の評価に反映したもの、「活動報告書・志望理由書・調査書」を一括りの配点にしたものもあります。「活動



報告書」は、主体性・多様性・協働性などの評価に適していますが、学力の3要素のほかの2つの要素を評価する資料にもなります。どの要素をどの方法で評価するのかは、大学・学部のアドミッション・ポリシーによるでしょう。一方、選抜資料として用いる以上、評価基準を示すことが必要と考え、県内の2つの高校と連携して、高校の課題研究のルーブリックを作成しました。大学が評価の観点を示すことで、高校生の活動の充実にもつながると考えています。

井上 生徒にも大きなメリットになります。学習、部活動、行事など、高校時代に一生懸命頑張ってきたことが、総合的に大学進学に結びつくのが「活動報告書」です。適切な評価につながるためには、1年生から活動の都度、その内容を記録することが重要になると思います。なぜなら、出願時に書こうとしても、1年生の頃のことはあまりよく覚えていないからです。そこで、「今ログ」(図3)を開設しました。出願時には、「今ログ」に書きためた記録を基に書類を作成すれば、内容は正確ですし、手間も軽減できると考えました。

井上 「今ログ」は、教師が把握しやすい学校外の取り組みも記録できます。進路指導に活用することで、生徒をより多面的に見取ることにもつながれると思います。

井上 高校教育も変わりつつあり、学生が高校で多様な経験を積んで大学に入学していることを、あまり意識していない大学教員もいます。高校と大学が密に情報交換をし、協力し、新たな仕組みをつくって、学生の力をさらに伸ばしたいと思っています。

図3 「今ログ」の画面



「今ログ」には、「意欲的に取り組んだ活動」「課題研究」「資格・検定・コンテスト等の状況」を記録できるほか、「進路メモ」として自分の考えも残すことができる。5大学への出願を前提とするものではなく、メールアドレスとパスワードを登録すれば誰でも無料で利用できる。

<https://shikoku.applyjapan.com>

5人の日本の高校生が、海外の高校生に挑戦！

ディベートの世界大会で 日本代表チームが2勝をもぎ取る！

2016年7月、ドイツのシュツットガルトで「World Schools Debating Championships」が開かれ、日本からは、全国から選抜された5人の高校生が出場した。全員そろつての練習機会が限られる中、個々にトレーニングを積み、結成式から本番までの5か月間で大きく成長。目標の4勝には届かなかったが、優勝経験のあるスコットランドに勝利するなど、大きな手応えが得られた大会となった。

予選突破を目指し、選手を選抜し、トレーニングを積む

「World Schools Debating Championships (WSDC)」(以下、世界大会)は、世界中の高校生が集まって開かれるディベート大会だ。1988年にオーストラリアで初めて開かれ、以降、世界各地を会場にして、毎年開催されている。

日本からは、全国高校英語ディベート連盟が主催する「全国高校生英語ディベート大会」(以下、全国大会。*)の優勝校が、2006年から毎年出場してきた。過去9回の総合成績は

72戦6勝66敗。09年出場校の長野県伊那北高校チームの2勝がこれまでの最高勝利数であったが、これには初出場のナイジェリアとの対戦も含まれており、幸運な面もあった。世界大会には英語を母国語とする国が多く出場していること、さらに、全国大会とは異なる方式が採用されていることから、なかなか予選を突破できなかった。

そうした状況を打破しようと、16年7月に行われた世界大会には、全国の高校から出場希望者を募って選考会を開き、5人の選手による代表チーム「Team Japan 2016」を結成して臨んだ。チームマネージャーで、

図1 アジア、及び世界大会概要

両大会とも、チームマネージャー、ジャッジ、選手の組み合わせで1チームとして参加。ジャッジは、自チーム以外の試合のジャッジを担当する。3人のジャッジがボート(vote、投票)した数が多いチームの勝利となる。

● Asia World Schools Debating Championships (AWSDC)

会場 タイ・バンコク

期間 2016年7月6～11日

参加国 12か国(南アフリカ、台湾、マレーシア、タイ、中国、日本、バングラデシュ、インドネシア、シンガポール、韓国、スリランカ、インド)、1か国で複数のチームが出場

試合方式 予選6試合+決勝ラウンド(ベスト8以上)

予選6試合すべて即興型

戦績 2勝6ボート

● World Schools Debating Championships (WSDC)

会場 ドイツ・シュツットガルト

期間 2016年7月19～29日

参加国 55か国(アメリカやイギリス、カナダなど、英語を母国語とする国も含まれる)

試合方式 予選8試合+決勝ラウンド(ベスト16チーム+8チーム)

予選8試合のうち、4試合は約1か月前に論題が発表される準備型、残り4試合はその場で論題が出される即興型

戦績 2勝7ボート(対戦相手:ウェールズ、カタール、ルーマニア、スコットランド、台湾、パキスタン、南アフリカ、クウェート)

* 2017年の世界大会は、インドネシアのバリが会場。

右記のサイトで参加選手を公募中。<http://henda.global/international/>

* 2006年12月に初めて開かれ、16年度で11回を迎える。詳しくは、全国高校英語ディベート連盟(HenDA)のウェブサイトをご覧ください。<http://henda.global/>

Team Japan 2016メンバー



チームマネージャー
池上 博
いけがみ ひろし
全国高校英語デイベート
連盟常任理事。長野県松
本県ヶ丘高校英語科教諭。



コーチ
丸橋 洋之
まるはし ひろゆき
埼玉県立浦和北高校英語
科教諭。



コーチ
大塚 智哉
おおつか ともや
慶應義塾大学4年生。

選手（写真右から）
栃木県立宇都宮高校3年
生

馬場 琢淳
ばば たくあ

千葉県・私立翔漢中学校・
高校3年生

関 天平
せき へんぺい

神奈川県・私立栄光学園
中学校・高校3年生

浅野 広太郎
あさの こうたろう

東京都・私立渋谷教育学
園渋谷中学高校2年生

松尾 萌黄
まつお もえぎ

東京都・私立渋谷教育学
園渋谷中学高校2年生

須藤 亜佑美
すどう あゆみ

全国高校英語デイベート連盟常任理
事の池上博先生（長野県松本県ヶ丘
高校教諭）は、次のように語る。

「ほかの国は、国内で代表選手を選
抜し、大会に向けて練習を重ねて出
場しています。一方、日本は、全国
大会の優勝校とはいえ、英語を小
中学校で初めて学んだ生徒が主体の
チームに世界大会への準備を任せき
りにしていました。数学オリンピック
クや物理オリンピックなどでは、日
本の高校生は上位の成績を上げてい
るのに、英語の世界大会では予選も
突破できていません。そうした状況
を変えたいと、今回、選考会を開き、
出場者に専任のコーチをつけてト
レーニングするなど、できる限りの
準備をして臨むことにしました」

今年2月に選考会を開いて5人の
代表選手を決め、すぐに保護者への
説明と結成式を行って、7月の世界
大会に向けての準備に入った。

練習は、全体練習と個人練習の2
本立てだ。選手の居住地が異なり、
それぞれの学校生活もあることから、
全員が集まることのできる日程を確
保するのは難しかった。選手一人ひ
とりにコーチをつけて、個人練習で

各自のデイベート力を上げていき、
全体練習では練習試合を中心に、行
い、実戦形式で弱点を補強していった。

また、チームとしての実戦経験を
積むために、主に大学生対象の2つ
の国内大会に出場し、さらに、世界
大会の直前に行われるアジア大会に
も出場することにした。

英語力だけでなく、 論理力も重視して選考

応募者19人の中から選ばれたのは、
栃木県立宇都宮高校3年生の馬場琢
淳さん、千葉県・私立翔漢中学校・
高校3年生の関天平さん、東京都・
私立渋谷教育学園渋谷中学高校2年
生の須藤亜佑美さん、同2年生の松
尾萌黄さん、神奈川県・私立栄光学
園中学校・高校3年生の浅野広太郎
さんの5人。いずれも、全国大会の出
場経験がある優秀なデイベーターだ。

選考では、英語力はもちろん、ディ
ベートに必要な論理的思考力も重視
された。5人のうち4人は海外在住
経験のある帰国子女という中、浅野
さんは、高校1・2年生の夏休みにア
メリカとイギリスでの語学研修（計

6週間）の経験があるのみだったが、
論理力が評価されて選出された。

「昨年、世界大会に出場した先輩が、
『世界大会はレベルが高く、とてもよ
い経験だった』と話しているのを聞
き、自分も出場したいと思い、応募
しました。選考会では周りは帰国子
女ばかりで英語力にハンディがある
とと思っていたので、選手に選ばれて
とてもうれしかったです」（浅野さん）

コーチには、自身も高校時代に世
界大会に出場した、慶應義塾大学4
年生の大塚智哉さんが就任した。世
界大会でのデイベート方式の実績が
豊富なことから、世界大会で勝ち抜
く方法を伝授するとともに、5人の
統括を担った。

写真1 全体練習は、その場で論題を与えてデイベートを行う実戦形式。コーチが選手のスピーチを制して、「10秒でチームのスタンスを言ってください」「自分の論に入るまでが長い」などと厳しく指摘。全員が集まる回数が限られるだけに、密度の濃い練習が続いた。

課題は、個性豊かな選手が まとまるためのチームワーク

世界大会での目標は4勝。それを達成するためにはいくつもの課題があった。まずは個々のディベート力を上げることだ。スピーチの構成力や表現力、ジャッジに分かりやすい話し方など、大塚コーチや個別コーチの指導の下、選手個々で課題を見だし、個人練習を積み重ねた。

次に、知識・教養の蓄積だ。論題には、アメリカのオバマ大統領の外交政策、FTA（自由貿易協定）など、普段の高校生活では話題に上らないようなことも取り上げられる。そこ

で5人は、SNS上にグループをつくり、それぞれが気になる時事ニュースや話題をアップし、知識を共有するようにした。

そして、最も大きな課題であったのが、チームワークを築くことだ。全体練習は5回、合宿は2回行われたが、5人全員がそろって練習できたのはわずか2回だけだった。SNSで連絡は取り合っていたが、互いの個性を知り、チームとして機能させるところまで持っていくのは厳しかったと、選手は口をそろえる。

「相手の考えを聞きながら、自分も主張しなくてはいけないところが難しかったです。意見が合わない時に、冷静に話を進められるように心がけました」（関さん）

「学校のチームが居心地がよかっただけに、代表チームでは自分からバリエーションを張ってしまい、それを取り除くのに苦労しました」（馬場さん）

大塚コーチは、チームとしての公的な関係を改善するためには私的な関係の構築が必要だと考え、自身の実家で合宿を開くなどの工夫をした。

「相手を思いやらなければ、単に意見のぶつかり合いになってしまいま

す。5人それぞれの実力を発揮するために、自分の弱点もさらけだし、互いをフォローし合う関係にしなければいけないと考えました」

そうした中、6月末に出場した国内大会で思うような試合ができず、その悔しさが大きな原動力となった。続く、アジア大会の初戦、インドネシア戦では、チーム全員が同じ方向に意識を向けたことで、驚くほどプレパレーション（準備）がうまくいったのだ。会心の勝利を収め、チームの目指すべき完成形が見えてきた。

「お互いに遠慮がなくなつて、正直にディスカッションして、チームとしてうまく協力できるようになりました。プレパレーションはその後の試合のよしあしを決めるので、毎回必死になりました」（松尾さん）

アジア大会の成績は6戦2勝6ポイントだったが、選手それぞれが手応えを感じ、世界大会に向けた課題を見いだせていた。

「相手のスピーチの根本を理解できていなくて、スピーチがかみ合っていないことが課題でした」（浅野さん）

「個人スコアを見ると、私のスピーチは自己満足のレベルで、ジャッジ

ジャッジとして参加して

指導者として、ジャッジの 立場を知ること大切

埼玉県立浦和北高校 丸橋洋之

アジア大会と世界大会、それぞれ6試合のジャッジを担当しました。ジャッジは3人で、自分が下した判定については、ほかの2人の判定と同じでも違つていても、判定した理由を明確に伝える必要があります。そうした毅然とした態度でいることや、いろいろな国の英語を聴き取ること、内容を理解するために知識や教養が必要なことなど、まだまだ勉強しなければと痛感しました。

日本では、英語ディベートの認知度をこれからも高めていかなければならず、ジャッジの育成も必須です。指導の際には、ジャッジがどのような考えの下に判断を下すのかを知らなければ指導ができません。そういった面でも、今回、世界トップクラスの中でジャッジの経験を積み、世界レベルのディベートを知ることができたのは、大きな収穫となりました。今回の日本チームの活躍を機に、多くの先生が英語ディベートに関心を持つていただければと思います。

写真2 みんなの考えが折り合わず、けんか寸前までいったこともあったという。しかし、「勝ちたい」という思いは同じ。「みんなともっとコミュニケーションを取ることを意識しました」と、浅野さんは振り返る。

に言いたいことが伝わっていないことに気づきました」(須藤さん)

「自分はチームの中でもリスニング力と単語力がなく、様々な国のアクセントへの対応に苦労しました。自分がどんな練習をするべきかを考え始めていました」(馬場さん)

ずっと目指してきた舞台で 英語圏の国から勝利!

そして迎えた世界大会。5人は持てる力をすべて出し、試合に臨んだ。「勝たなければと気負うこともなく、むしろ挑戦者として強い国とどれだけやれるか楽しみで、今まで積み上げてきたものをすべてぶつけました」(馬場さん)

初戦のウェールズ戦は敗れたが、続くカタル戦は初勝利を収めた。

「以前のチームならば、難しい論題に自滅して負けていましたが、カタル戦では、プレパレーションで考えたことが少しずれていても、ディベートが進むにつれて軌道修正できました」(須藤さん)

チームとして最もよく機能していたのは4戦目のスコットランド戦だったと、須藤さんは続ける。

「各自が役割を果たし、言うべきことを伝えたことが、スコットランド戦の勝利につながったのだと思います。英語圏の国から2ボートを取り、世界大会でも勝てるんだと、チームで喜びにわきました」

丸橋先生もチームの確かな成長を

感じたという。

「選手は自分の強みと弱みを把握して、例えば、効果的なスピーチの方法を聞さんに聞くなど、互いのよいところから学ぼうとする謙虚な姿勢が見られました」

将来的には、 日本で世界大会の開催を

大塚コーチは、今回の世界大会での成果を次のように述べた。

「結成当初は議論にもなっていないでしたが、練習を重ねるうちに筋が通るスピーチができるようになりました。もともと英語力のある選手たちでしたから、論が立てられると、考えを確実に英語で表現でき、ジャッジに伝えられるようになりました。普段から『エコノミスト』『タイム』を読むなど、意識が高く、洞察力もあり、物事を考える力が高い選手たちだったからこそ、過去最高の結果を出せたのだと思います」

すべてが終わり、選手は仲間への感謝を口にする。

「後でコーチがいかに自分たちのことを考えてくれたのか、チームメー

トがいかに多くの努力をしてきたかを知り、自分から変わる大切さを改めて感じました。自分はまだまだですが、世界に出て活躍できるように精進しようと思います」(浅野さん)

「本場に最高のチームでした。それぞれに個性的な人たちで、ぶつかり合っていた頃はそれが嫌でしたが、今はこのチームで出られたことに感謝しています」(松尾さん)

世界大会に初めて代表チームで出場するという挑戦は、次への確実な布石となった。今後の展望について、池上先生は次のように語る。

「大会中、他国のジャッジに『日本チームの英語は分かりやすかった』と言われ、今年の日本は今までとは違うことを印象づけられました。その成果を17年大会にもつなげることが目標です。日本が世界大会の開催国になれるような時代がいつかくればよいなと思っています。そのためには、選手層の底上げ、ジャッジの育成・強化など、様々な課題がありますが、今大会のような出場形式を改善・定着させることで、国内での英語ディベートと世界大会との連結を強化していきたいと思います」

写真3 チームとして会心のディベートができたとしても勝てるわけではない。試合後は、敗戦の要因を分析し、次の試合へとつなげた。

写真4 世界大会4日目には、出場各国が自国の遊びや食べ物などを紹介する「Cultural Expo」が開かれ、文化交流を楽しんだ。

今まで以上に学校に求められる組織力の向上

8月号の特集を読んで強く感じたのは、ビジネス書などでよく見かける「組織力」が、これまで以上に学校教育で求められるようになってきていることだ。もちろん、これまでも教科や学年、部活動などの組織を中心に学校は運営されてきたが、それらの小さな集団の枠を超えて学校という大きな枠組みで物事を考えていく時代に本格的に入ってきたのだと思う。高校教育改革の中で求められる「生徒を多面的に評価する」ことや、教科横断的な探究活動を行わせるための「カリキュラム・マネジメント」など、個人や小集団では達成できないことが増えてきたことを、今回の特集で改めて実感した。

〔茨城県立水戸第一高校・川久保典昭〕

達成感が日々の活力を生む

8月号の「ハートをこがせ!」を読み、食文化の担い手を育てる上でも、三重県立相可高校が取り組んでいることには大きな意味があると思った。人から感謝されることを、調理を行う実践の場で実際に感じ取れることはよい経験になるし、どんな形であれ、達成感を感じることが、毎日の活力を生むことになる。難しいことではあるが、そのような場をすべての高校生に与えられないものだろうか。

〔静岡県立浜松南高校・中野雅弘〕

「待つ」ことがアクティブ・ラーニングをよりよくする

8月号の「実践 アクティブ・ラーニング」

Reader's VIEW

Volume 4

読者の先生方からのご意見を紹介します

「仕かける進路指導」の大切さを認識

は、とても参考になった。特に、生徒に「自分の軸」をつくらせるという視点は、改めて大切だと強く感じた。以前から「待つ」ことを重視しているが、この授業はその最たるものなのだと思う。「待つ」ことは、指導側の力量が問われるが、そのためには、観察力と生徒には見えないコントロール力が必要になる。それらが欠けると、恐らくアクティブ・ラーニングは、うまく成り立たないのではないかな。待つことができる教師の自信が、アクティブ・ラーニングをよりよくすることになると思う。

〔埼玉県・私立大妻嵐山中学校・高校・久保島昌二〕

8月号「指導変革の軌跡」の群馬県立桐生高校は、本校と学校事情が似ており、大変興味深く拝読した。「難関大志望チャレンジセミナー」の開催のみならず、校長室で担任が礼服で臨む模試の成績優秀者の表彰や、幟に染めたスローガンをういた決起集会など、「演出」や「仕かけ」が実に面白い。学年が進路行事の企画・運営を行う点や「上昇桐生」という進路だよりのネーミングも含め、取り組みにかける教師の想いや熱意が伝わってくる。改めて、「仕かける進路指導」の大切さを認識した。

〔滋賀県立草津東高校・堀浩司〕

教師川柳

それぞれの生徒が主役の秋行事

兵庫県・とんちんかん

『VIEW21』高校版はウェブサイトでもご覧いただけます!

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「改良! 指導ツール ビフォーアフター」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



編集後記

◎今号の「ハートをこがせ!」の取材では、埼玉県上尾橘高校の生徒たちと一緒に、南三陸町を訪問いたしました。私が被災地を訪問したのは4回目ですが、道などが整備され、復興が進んでいることがうかがえた一方、今なお仮設住宅で暮らす方々を見て、自分の震災の記憶や印象が薄れていることに気づきました。ある生徒は、「実際に目で見て、聞いたことを伝え続けなければならない」と話していましたが、発信し続けることの大切さを再認識しました。今回の記事も、その1つとなれば幸いです。(廣田)

VIEW21 10月号 Vol.4

2016年10月17日発行

発行人 山崎昌樹
編集人 春名啓紀
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 (株)協同プレス
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸 満、二宮良太、長谷川敦
撮影協力 荒川 潤、川上一生、田中秀和、筒井岳彦、ヤマガチイキ

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2016

VIEW21

2016
December
12月
Volume 5

次号は
12月12日発行(予定)
『VIEW21』高校版は
年6回の発行です

COVER STORY

教師と生徒の肖像

チームワークを力に

表紙の学校 宮城県仙台^{さんおう}三桜高校 高瀬琢弥^{さんおう}先生

宮城県仙台三桜高校の自慢は、生徒たちのチームワークのよさだ。例えば、合唱コンクールに向けて、音楽部の生徒が、自分のクラスだけでなく、音楽部員のいないクラスにも発声法などを指導する。授業中や休み時間の生徒同士の学び合いは、日常的に見られる光景だ。進路が決まった生徒も、進学に向けての課外講習に毎回参加し、受験に向かう雰囲気を盛り立てる。

そうした生徒たちを、教師たちも一致団結して支える。全学年対象の土曜学習会、3年生対象の平日課外講習は、生徒の希望進路別にきめ細かく行う。また、推薦入試志望者には、全学年の教師が分担して、提出書類の添削や面談の指導にあたる。家庭学習記録は、生徒と担任が毎日やり取りし、日頃の声かけにつなげる。「東日本大震災から5年が経ちましたが、復興はまだこれからで、そのために進路に悩む生徒は少なくありません。しかし、つらいことから逃げ出さず、最後まで挑戦できれば、たとえ希望とは違う進路であっても、大きく成長できるはずですよ。生徒が悔いなく力を出し切れるよう、教師全員で見取るチーム力が本校の強みです」と、進路指導部長の高瀬琢弥先生は胸を張る。「一人ひとりの希望進路が達成できるようにと、いつも先生方が見ていると感じます。だから、先生方には何でも相談できるし、安心して頑張れる」と、3年生の生徒は言う。

人と人とのつながりの大切さを感じている生徒たちだからこそ、高瀬先生は希望を託す。「自分の夢に向けて頑張ることが一番大切ですが、それにプラスして、復興に貢献できる『人財』を目指してほしいと思います。仲間と育んできた思いやりの心を、今度は社会にも向けていくこと——。震災を経験した生徒たちなら、そうした『人財』になれると信じています」。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume4 2016年10月号

2016年10月17日発行/通巻第360号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2016

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17